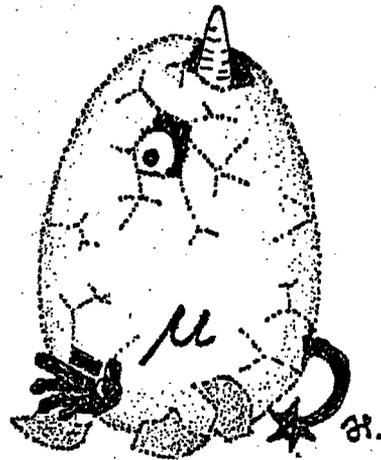


日本生物学会誌

第 49 号



日本生物学会

1996年10月1日

も く じ

奥野良之助：毛沢東『実践論・矛盾論』を読む（４）
『矛盾論』（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1979

奥野良之助：ダーウィン『種の起原』を読む（５）
第四章『自然選択』（２）・・・・・・・・・・・・・・・・ 2010

【編集者への手紙】・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2023

奥野良之助

矛盾の普遍性について述べた毛沢東は、次に、矛盾の特殊性について解説する。ここは『矛盾論』のなかで、毛沢東がいちばん力を入れているところでもある。

三 矛盾の特殊性

矛盾はあらゆる事物の発展の過程に存在しており、矛盾は一つ一つの事物の発展過程を始めから終わりまでつらぬいている。これが矛盾の普遍性と絶対性で、これについては、すでに前にのべた。これから矛盾の特殊性と相対性についてのべよう。

この問題は、いくつかの状況をつうじて研究しなければならない。

まず、物質のさまざまな運動形態のなかの矛盾は、いずれも特殊性をもっている。人間が物質を認識するというのは、物質の運動形態を認識するのである。なぜなら、世界には運動する物質のほかにはなにものもなく、物質の運動はかならず一定の形態をとるからである。

物質の認識は物質の「運動形態」の認識である、ということは、少々分かりにくいかも知れない。私の部屋の中には、机があり、椅子があり、灰皿もあるが、それらはじっと止まっているだけで運動しているとは思えない。机の上にならず高く積み上げられている各種の書類は、時々「運動」しているが、一方、私の部屋にやってくる学生のほうは、けっこう動く。立ったり座ったりするだけではなく、数日のうちに「人が変わった」ようにもなる。学園闘争のとき、学友がグバ棒を持って闘っているのを見ながら、「どうしても、その中にはいれないんです」と悩みを打ち明けていた学生が、そのあくる日に、ヘルメットをかぶり角材を持って生き生きと走り回っていた。「学生なんか、信用しては駄目ですよ」と、水族館にいた私のところへわざわざやってきて忠告してくれたのは、この春、不名誉会員から100円会員に出世した、前京都大学瀬戸臨海実験所所長の原田英司名誉教授であった。

最近そんな学生はいなくなったが、教官はそういう学生の変化を見て、学生なるものを認識するのである。変化しない学生は認識しにくい。どれを見ても同じに見えるし、区別がつかない。まあ、こちらが年齢取ったせいもあるけどね。

そういう目で机や椅子や灰皿を見ると、これらもごくゆっくりとはしているが、崩壊への道を歩んでいることが分かる。私の部屋に「一度座ったら二度と立ち上げられない椅子」という有名なソファがあるが、体重90キロを越すあるドクターの院生が愛用していたころは、崩壊が目に見えて進んでいた。

ようするに、すべてのものごとを静止的ではなく動的に見ろということなのである。

物質の一つ一つの運動形態については、それとその他のさまざまな運動形態との共通点に注意しなければならない。しかし、とくに重要なことで、われわれが事物を認識する基礎となるものは、その特殊点に注意しなければならないということ、つまりそれとその他の運動形態との質的なちがいに注意しなければならないということである。この点に注意してはじめて、事物を区別することができるようになる。

ものごとには、共通点と特殊点（そのものだけが持っている、他のものにはない点）とがある。区別点に目をつけてものごとを次第に細かく区別していくと、もうこれ以上区別できないところに達する。それを種（スピーシーズ）という。次に似たものを集めてグループを作る。これが類である。この種と類を使って生物を分類したのがアリストテレスであった。ここではものごとすべて運動していることになっているから、類も種も、運動形態の共通点と特殊点を区別しなければならないことになる。

いかなる運動形態にも、その内部にそれ自身の特殊な矛盾がふくまれている。この特殊な矛盾が、ある事物を他の事物から区別する特殊な本質を構成している。これが、世界のさまざまな事物が千差万別であることの内在的な原因であり、根拠といわれるものである。自然界には、たくさんの運動形態が存在しており、機械的運動、音、光、熱、電流、分解、化合など、みなそれぞれである。これらの物質の運動形態は、みなたがいに依存しあい、また本質的にたがいに区別しあっている。物質のそれぞれの運動形態がもっている特殊な本質は、その運動形態自身の特殊な矛盾によって規定される。このような状況は、自然界のなかに存在しているばかりでなく、社会現象および思想現象のなかにも、おなじように存在している。一つ一つの社会形態と思想形態は、みなその特殊な矛盾と特殊な本質をもっている。

その運動形態（ものごと）が違うのは、そのものを動かしている内部の矛盾が違うからだ、と毛沢東は言う。これがそのもの持つ特殊な矛盾である。自然界でもそうだし、社会でも、ひいては頭の中（思想）でもそうである。私が他人とは違う考えを持っているのは、私の頭の中に特殊な矛盾があるからに違いない。

科学研究の区分は、科学の対象がもっている特殊な矛盾性にもとづいている。したがって、ある現象の領域に特有なある矛盾についての研究が、その部門の科学の対象を構成する。たとえば、数学における正数と負数、力学における作用と反作用、物理学における陰電気と陽電気、科学における分解と化合、社会科学における生産力と生産関係、階級と階級との相互闘争、軍事学における攻撃と防御、哲学における観念論と唯物論、形而上学と弁証法など、みな特殊な矛盾と特殊な本質をもっているからこそ、異なった科学研究の対象を構成しているのである。

科学にはさまざまな分野がある。それは、研究する対象が違うからだと考えられている。自然科学は自然を対象とし、社会科学は社会を対象とする。私はかつて、博物館学なる学問を作り直そうと考えて、毎日、水族館の前の喫茶店におもむき、哲学的考察にふけていたことがある。出勤してハンコを押した後、裏口から喫茶店に行く。偉い人は気がついていないだろうと思っていたら、ある日喫茶店に電話がかかってきた。「奥野さん、水族館に電話がかかっていますよ」

それはともかく、まず考えたのが博物館学の研究対象である。その頃（今でもそうだと思うが）博物館学は教育学の一分野だとされていた。でも、教育を研究対象にしているとは思えない。さまざまな考察をくりかえした結果、博物館学の研究対象は「博物館」である、という結論に達した。生物学が生物の研究をするように、博物館学は博物館の研究をするのである。博物館は社会の中に存在する一つの施設である。だからそれは、教育学ではなくて社会学の一分野となる。そこまで考えたとき、金沢大学から呼ばれて教官となり、博物館学の建設は打ち切りとなった。惜しいことをしたね。

博物館は、自然や社会のさまざまなものを並べて、見学者に見せる場所である。博物館のほうは見学者を教育してやろうと工夫を凝らす。でも見学者は博物館の思惑にはなか

なか乗らない。そこで、博物館と見学者の間に「矛盾」が生じる。その矛盾が博物館を動かし発展させる。これこそが博物館学なのだが、現実の博物館は、お高く止まって見学者に「拝観」させているか、見学者におもねって、見世物小屋になっているか、どちらかである。まあ、大学における講義などもだいたい同じだね。講義に対する学生の評価などが持ち込まれるようだが、講義が次第に見世物小屋的になっていくかも知れない。

もちろん、矛盾の普遍性を認識しなければ、事物が運動し発展する普遍的な原因、つまり普遍的な根拠を発見するすべもなくなる。しかし、矛盾の特殊性を研究しなければ、ある事物が他の事物と異なる特殊な本質を確定するすべもなく、事物が運動し発展する特殊な原因、つまり特殊な根拠を発見するすべもなく、また、事物を識別し、科学研究の領域を区分するすべもない。

博物館と見学者の間の矛盾は、大学と学生の間の矛盾と、基本的に同じである。それは、いわゆる教育施設としての普遍性である。しかし、それだけでは大学も博物館も動物園も水族館もみんないっしょになって、それぞれの持つ特性が区別できなくなる。学生でも手を焼く難しい講義を水族館でやってみても、赤字が増えるだけだろう。教育するものと教育されるものという点では共通していても、大学は大学、水族館は水族館で、それぞれの矛盾を具体的に明らかにしなければ、事実上何もできなくなる。

そこでどうするか。毛沢東は、人間の認識運動から次のように説明する。

人類の認識運動の順序についていうと、それはつねに、個々の、また特殊の事物の認識から、しだいに一般的な事物の認識へと拡大していくものである。人びとは、つねに、まず多くの異なった事物の特殊な本質を認識し、そののちはじめにさらに一步すすんで概括作業をおこない、さまざまな事物の共通の本質を認識することができるのである。すでにこの共通の本質を認識したならば、この共通の認識を手びきとして、ひきつづき、まだ研究されたことのない、あるいはまだふかく研究されたことのない、さまざまな具体的な事物にたいする研究をすすめて、その特殊な本質をさがしだす。そうしてはじめて、この共通の本質の認識がひからびた、硬直したものにならないように、この共通の本質の認識を補足し、豊富にし、発展させることができるのである。

水族館にいと、水族館のこと（矛盾）はよく分かる。次に動物園に行くと、動物園の具体的な矛盾が理解される。大学には大学特有の矛盾がある。こうした操作をくりかえしていくうちに、教育一般の共通した矛盾が分かってくる。認識の順序としてはこうであり、決して逆ではない。

私たちのやった学生運動では、たいていの学生がまずマルクス主義の本を読んで、社会運動、階級闘争の一般理論を頭に詰め込み、それから実際の運動を始めることになっていた。いきおい、現実を無視して運動は先鋭化し、跳ね上がる。吉田内閣を打倒して革命を実現させるつもりだったのだからね。よく出てくる私の筋違いの恩師、故徳田御稔氏があるとき、こんなことを言った。

「君たち、早いこと、革命、やってくれよ」「そんなに急かさんといってくださいよ。そのうちやりますから」「君らは若いからいいけど、こっちはもう先が短いからな。わしの生きているうちに、革命、見せてくれ」

私もそのときの徳田先生の年齢を過ぎてしまったが、革命どころか、反革命を見てしまった。それはそれで、おもしろいけどね。

もっとも私は、学生運動を始めたとき、マルクス主義のマの字も知らなかったから、知らずして毛沢東の勤めにしがっていたことになる。

さて、現実具体的に特殊な問題の経験をして、普遍的な矛盾を体得すると、今度はそれを別の特殊な問題に当てはめることは可能である。水族館の矛盾から教育一般の矛盾を理解すれば、動物園の特殊な矛盾も分かるようになる。ただし、単に当てはめるだけではない、と毛沢東は言う。「共通の認識」を「手びき」として、やはり具体的に「研究」しなければならないのである。こうしていくことによって、「共通の認識」がさらに豊かになっていく。

そのことを、毛沢東は次のように要約する。

これは、一つは特殊から一般へ、一つは一般から特殊へという、認識の二つの過程である。人類の認識は、つねにこのように循環し、往復しながらすすむのであって、その一循環ごとに（厳格に科学的方法にしたがうかぎり）人類の認識を一步高め、たえずふかめていくことができる。

まず自分が当面している問題（特殊）に対して、『実践論』で説かれていたようなやり方、感性的認識から突然の飛躍を通じて理性的認識に達し（一般）、そこで得た概念や理論をまた新しい問題（特殊）に適用して行く。これのくりかえしで、人間の認識は深まっていく、というわけである。

そして毛沢東は、党内の教条主義者に批判を向ける。

われわれの教条主義者たちの、この問題についてのあやまりは、すなわち、一方では、矛盾の普遍性を十分認識し、さまざまな事物の共通の本質を十分に認識するには、矛盾の特殊性を研究し、それぞれの事物の特殊な本質を認識しなければならないということがわかっていないこと、他方では、われわれが事物の共通の本質を認識したあとでも、まだふかく研究されていないか、あるいは新しくあらわれてきた具体的な事物について、ひきつづき研究しなければならないということがわかっていないことにある。われわれの教条主義者たちはなまけものである。かれらは具体的な事物について、骨のおれるどんな研究活動もこぼみ、真理一般がなんのよりどころもなくあらわれてくるものとみなし、それをとらえることのできない純抽象的な公式にしてしまい、人類が真理を認識するというこの正常な順序を完全に否定し、しかもそれを転倒するのである。かれらはまた、特殊から一般へそして一般から特殊へという、人類の認識の二つの過程の相互の結びつきがわからず、マルクス主義の認識論がまったくわからないのである。

社会主義革命の理論は、マルクスやエンゲルスやレーニンが作り上げている。これは、彼らが個々の特殊な問題を研究し、そこから一般理論を引き出したものである。ところが、場所が変わり時代が変わり、条件が変わってくれば、その一般理論がどこでも通用するわけではない。ロシアではうまくいったことでも、中国ではうまくいかないのが当たり前なのである。そこで、中国で革命をしようと思ったら、まず中国で、その特殊性を経験し研究して、一般理論の訂正をしなければならぬ。その特殊性を無視して、いきなり一般理論を当てはめようとするのが、教条主義者だというわけである。

だが、毛沢東がほんとうに言いたいことは、こんなことではないかと思う。一般理論を当てはめただけでうまく行く場合でも、やはりその場の特殊性について実際に経験しなければならぬ。なぜなら、そういう経験・実践こそが、その人を鍛え、考えを深めるからである。「教条主義者はなまけものだ」という言葉がそれを表わしているのではあるまいか。

生物学にも、DNAドクトリンをはじめ、いろいろな一般理論がある。自然選択による進化というのもその一つだろう。優れた一般理論が出ると、大方の生物学者は、それを個々の生物に当てはめようとする。カイコでも見つかった、ショウジョウバエでも見つかった

た、ではイエバエならどうか、といったたぐいである。毛沢東に言わせれば、彼らは典型的な「教条主義者」となる。ヒキガエルはヒキガエルとして、実際に調べて認識しなければならない。

ここには、個々の特殊性の総合として普遍性があるのであり、普遍性の特殊な表われとして特殊性があるのではない、という毛沢東の考えがにじみでている。

物質の一つ一つの大きな体系としての運動形態がもつ特殊な矛盾性と、それによって規定される本質を研究しなければならないばかりでなく、物質の一つ一つの運動形態の、長い発展の途上での一つ一つの過程の特殊な矛盾とその本質も研究しなければならない。あらゆる運動形態の、憶測でなく実際する一つ一つの発展過程は、すべて質を異にしている。われわれの研究活動はこの点に力をいれ、またこの点からはじめねばならない。

ものごと（運動形態）の違いは、そのなかに含まれている特殊な矛盾のためである。こうしてものごとの質的な差が区別される。ところが、これで終わったわけではない。世の中には簡単なものごともある、毛沢東が今取り組んでいる中国革命といった、大きく長期間続く（中国革命は100年間かかった）巨大なものごともある。そういう大きく長い運動には、数多くの特殊な矛盾が含まれていて、その運動の各段階でまた特殊な矛盾がいろいろと変わっていくのである。

質の異なる矛盾は、質の異なる方法でしか解決できない。たとえば、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾は社会主義革命の方法によって解決され、人民大衆と封建制度との矛盾は民主主義革命の方法によって解決され、植民地と帝国主義との矛盾は民族革命戦争の方法によって解決され、社会主義社会における労働者階級と農民階級との矛盾は農業の集団化と農業の機械化の方法によって解決され、共産党内の矛盾は批判と自己批判の方法によって解決され、社会と自然との矛盾は生産力を発展させる方法によって解決される。過程が変化し、ふるい過程とふるい矛盾がなくなり、新しい過程と新しい矛盾が生まれ、それによって、矛盾を解決する方法もまたちがってくる。ロシアの二月革命と十月革命とでは、解決された矛盾およびその矛盾の解決にもちいられた方法が根本的に異なっていた。異なる方法によって異なる矛盾を解決すること、これはマルクス・レーニン主義社会の厳格にまもらねばならない原則である。教条主義者たちはこの原則をまもらない。かれらは、さまざまな革命の状況のちがいを理解せず、したがって、異なる方法によって異なる矛盾を解決しなければならないということも理解しないで、動かすことのできないものとおもいこんでいるある公式を千篇一律に、どこにでもむりやりあてはめるだけである。これでは、革命を失敗させるか、もともとうまくいくことをめちやくちやにするばかりである。

矛盾が違えば解決の方法も違う。当たり前のことだが、その例を毛沢東はたくさん挙げている。「社会と自然との矛盾は生産力を発展させる方法によって解決される」というのは、ちょっとただけだね。でもそれは、私たちが現在、資本主義的自然開発の極端に進んでいる社会で考えているからで、1997年頃の中国では、自然な考えだったのかも知れない。それに、問題は「生産力の発展」の方法であり、単に生産力の量的な増大ということでもない。このあたりの議論を始めると大変だから、ここではやめておく。ここで毛沢東が言っていることは、運動形態が違えばもちろんのこと、一つの継続した運動でも、その段階によって矛盾は変わってくるのだから、まずそれを調べて、それに合った矛盾の解決方法を見つけだせ、と言うものである。

事物の発展過程における矛盾がその全体のうえで、相互の結びつきのうえでもっている特殊性をあばきだすには、つまり、事物の発展過程の本質をあばきだすには、過程における矛盾の、それぞれの側面の特殊性をあばきださなければならない。そうしなければ、過程の本質はあばきだせない。この点もまた、われわれが研究活動をするにあたって十分注意しなければならないことである。

ここではさらに、「矛盾の、それぞれの側面の特殊性」ということが出てくる。矛盾というのは二つのものあい争っていることであり、当然そこには二つの側面がある。教授と学生との矛盾には、教授という側面と学生という側面があり、それぞれの側面は違うわけで、そこをちゃんと分析しなければならない。このことは、次の節の「主要な矛盾と矛盾の主要な側面」の中に詳しく説かれている。

大きな事物には、その発展過程に多くの矛盾がふくまれている。たとえば中国のブルジョア民主主義革命の発展には、中国社会の被抑圧諸階級と帝国主義との矛盾があり、人民大衆と封建制度との矛盾があり、プロレタリア階級とブルジョア階級との矛盾があり、農民および都市小ブルジョア階級とブルジョア階級との矛盾があり、それぞれの反動的支配者集団のあいだの矛盾があるなど、その状況は非常に複雑である。これらの矛盾にはそれぞれ特殊性があって、これを一律にみてはならないばかりでなく、一つ一つの矛盾の二つの側面にもそれぞれ特徴があるので、これも一律にみてはならない。われわれ中国革命にたずさわるものは、それぞれの矛盾の全体のうえで、すなわち矛盾の相互の結びつきのうえでその特殊性を理解しなければならないばかりでなく矛盾のそれぞれの側面から研究していくことによって始めて、その全体を理解することができる。矛盾のそれぞれの側面を理解するということは、その一つ一つの側面がどんな特定の地位をしめているか、それぞれどんな具体的なかたちで相手かたとたがいに依存しあいながらたがいに矛盾しあう関係をもつか、また、たがいに依存しあいながらたがいに矛盾しあうなかで、そして依存がやぶれたのちに、それぞれどんな具体的な方法で相手かたと闘争するかを理解することである。これらの問題の研究はきわめて重要なことである。レーニンが、マルクス主義のもっとも本質的なもの、マルクス主義の生きた魂は、具体的状況にたいする具体的分析にある、といっているのはつまりこういう意味である。われわれの教条主義者たちは、レーニンの指示にそむいて、どんな事物についてもこれまで頭をつかかって具体的に分析したことはなく、文章を書いたり演説をしたりすると、いつも中身の無い紋切り型のものになってしまい、わが党内に非常にわるい作風をつくりだした。

中国は大きく古い国で、そのなかにはさまざまな階級や勢力がある。しかも当時は諸外国が、とくに日本が、中国を植民地にしようとして圧力を加えていた。中にはこれと結んで利益を得ようとしている者もいて、まさに複雑怪奇な様相を呈している。それを毛沢東は、「矛盾」と「矛盾の二つの側面」によって分析しているのである。その上で、それぞれの矛盾とその側面を具体的に調べなければならない。その調べ方について毛沢東はさらに説明する。

問題を研究するには、主観性、一面性および表面性をおひることは禁物である。主観性とは、問題を客観的に見ることを知らないこと、つまり唯物論的観点から問題を見ることを知らないことである。この点については、わた

しはすでに『実践論』のなかでのべた。

調べるとき、主観的・一面的・表面的に見るな、ということである。客観的・全面的・内面的に調べよということ、これらは自然科学の研究のときにもやかましく言われる。でも、自然科学者は必ずしもそうはしていない。たいてい何かの思い込み（定説）で見ているし、全面的・内面的に見るのは大変だものね。

一面性とは、問題を全面的に見ることを知らないことである。たとえば、中国の方について知っているだけで日本の方を知らない、共産党の方について知っているだけで国民党の方を知らない、プロレタリア階級の方について知っているだけでブルジョア階級の方を知らない、農民の方について知っているだけで地主の方を知らない、順調な状況の方について知っているだけで困難な状況の方を知らない、過去の方について知っているだけで将来の方を知らない、個体の方について知っているだけで全体のほうを知らない、欠点の方について知っているだけで成果の方を知らない、原告の方について知っているだけで被告の方を知らない、革命の秘密活動の方について知っているだけで革命の公然活動の方を知らない、といったことなどである。一口にいえば、矛盾の各側面の特徴を知らないのである。こういうのを、問題を一面的に見るといっているのである。あるいは、局部だけを見て全体を見ない、木だけを見て森を見ないともいう。これでは、矛盾を解決する方法を見いだすことはできず、革命の任務を達成することはできず、うけもった仕事をりっぱにやりとげることはできず、党内の思想闘争を正しく発展させることはできない。孫子は軍事を論じて、「かれを知り、おのれを知れば、百戦あやうからず」といっている。かれは戦争をする双方についていっているのである。唐代の人、魏徴は「兼（あわ）せ聴けば明るく、偏（かたよ）り信ずれば暗し」といっているが、やはり一面性はまちがいであることがわかっていたのである。ところが、われわれの同志は、問題をみるばあい、とかく一面性をおびがちであるが、こういう人はしばしば痛い目にあう。『水滸（すいこ）伝』では、宋江が三回祝家荘（チュウチャチョワン）を攻撃するが、始めの二回は状況がわからず、やり方もまちがっていたので敗北した。そののち、やり方をかえて、状況の調査からはじめた。そこで迷路にも明るくなり、李家荘（リーチャチョワン）、扈家荘（ホーチャチョワン）と祝家荘との同盟をきりくずし、また敵の陣営内に伏兵をはいりこませ、外国の物語にでてくる木馬の計に似た方法をとって、三回目の戦いに勝利した。『水滸伝』には、唯物弁証法の事例がたくさんあるが、この三回の祝家荘攻撃は、そのなかで、もっともよい例だといえる。レーニンはいっている。「対象をほんとうに知るためには、そのすべての側面、すべての連関と『媒介』を把握し、研究しなければならない。われわれは、けっして完全にそこまでたつすることはないだろうが、全面性を要求することは、われわれをあやまりや硬直に陥らないよう用心させてくれる。」われわれは、この言葉を銘記しなければならない。

「かれを知り、おのれを知らば、百戦あやうからず」というのは、ご存知孫子の兵法に出てくる言葉である。敵の力を探り、味方の力と比べて、敵のほうが強かったら逃げ、弱かったら攻める。こうすれば確かに負けることはない。「百戦百勝」ではなく「百戦あやうからず」である。当たり前のことのようにだが、この言葉の重点は「おのれを知らば」にある。敵の力はスパイなど使って調べるのだが、これは比較的正確にわかる。なぜなら、敵は自分ではなく、「客観的」に調べられるからである。難しいのは「おのれを知る」ことで、この場合どうしても「主観的」になってしまう。だいたい人間は、自分の力を自覚

する場合、力以上に思うか、力以下に考えるか、どちらかになる。前者を自惚れといい、後者を自己卑下という。前者は無理な戦いを仕掛けて常に敗れ、後者は勝てる戦いを避けて逃げ回ることになる。もっとも、「かれを知らず、おのれを知らず、百戦あやうし」といった学生もいて、冷や冷やすることもある。まあ、大学改革の運動などは、負けても何ということはないから、勝てる見込みがなくとも戦いを仕掛けることもあっていい。われわれの「戦い」はこの25年間、「かれを知り、おのれを知っても、百戦百敗」であった。一度勝ちそうになって大いにあわてたこともある。

『水滸伝』というのは、『三国志演義』『紅樓夢』とともに、中国の三大小説とされているものだが、これはおもしろいから、まだ読んでいない人にはぜひお勧めする。時代は宋朝、食いつめたあぶれ者108人が、梁山泊という根拠地に集まり、英雄豪傑として官軍と戦い、大いに打ち破る。かつて私の部屋（生態一研）に、あぶれた学生がたくさんたむろしていたとき、ある先生から、「君の部屋は梁山泊みたいだな」と言われたことがある。本もののような豪傑がいなかったから鳴かず飛ばずだったのだが。毛沢東はかつて、井冈山という山の中に根拠地を設けて立てこもったことがあるが、きっと梁山泊を二重写しにしていたのだろう。

表面性とは、矛盾の全体も矛盾のそれぞれの側面の特徴もみず、事物に深くはいつて矛盾の特徴をこまかく研究する必要を否定し、ただ遠くからながめて、矛盾のちょっとした姿を大ざっぱにみただけで、すぐ矛盾の解決（問題の解答、紛争の解決、仕事の処理、戦争の指揮）にとりかかろうとすることである。こんなやり方では、まちがいをしでかさなはずがない。

いわゆる感性的認識にとどまるな、ということだろう。もっとも毛沢東は、感性的認識を積み重ねればある日突然の飛躍が生じて理性的認識に達する、つまり何でもわかる、と『実践論』で言っていたが、ここでは少し具体的に、理性的認識に達する方法を述べている。

中国の教条主義者や経験主義者があやまりをおかしたのは、事物を見る方法が主観的であり、一面的であり、表面的だったからである。一面性も表面性も主観性である。なぜなら、すべての客観的事物はもともとたがいに関係しあったもの、内部法則をもったものであるのに、人びとがこの状況をありのままに反映しないで、ただ一面的に、あるいは表面的にそれを見る、つまり事物の相互関係を認識せず、事物の内部法則を認識していないからである。したがって、このような方法は主観主義的である。

自然科学者にとってはしごく当たり前のことなのだが、前に述べた通り、自然科学者と言えども、よほど用心していなければ「主観主義的」になる。まあ、革命と違って自然科学の場合は、ヒキガエルを少々捕え損なっても誰も死なないから気楽ではある。

われわれは、事物の発展の全過程における矛盾の運動にたいして、その相互の結びつきとそれぞれの段階にもやはりその特徴があり、それにも注意しなければならない。

事物の発展過程における根本的矛盾と、この根本的矛盾によって規定される過程の本質は、その過程が完了するときでなければ消滅しない。しかし、事物の発展する長い過程のなかのそれぞれの発展段階は、その状況がたがいにちがうことがよくある。これは事物の発展過程における根本的矛盾の性質と過程の本質には変化がなくても、長い過程でのそれぞれの発展段階で、根本的矛盾がしだいに激化する形式をとるからである。しかも、根本的矛盾に

よって規定されるか、あるいは影響される大小さまざまな多くの矛盾のうち、一部のものは激化し、一部のものは一時的にあるいは局部的に解決されたり緩和したりし、さらに一部のものは発生するので、過程に段階性があらわれるのである。もし、人びとが事物の発展過程のなかの段階性に注意しないとしたら、事物の矛盾を適切に処理することはできない。

根本的矛盾というのは、その運動過程を規定し支配している矛盾のことである。それがその運動過程を決めているのだから、その過程の初めから終わりまで存在しているのは当然である。しかし、長く続く過程では、その矛盾があまり目立たない時期もあれば、激化して闘争にいたる時期もある。また、大きな過程では、根本的矛盾のほかにも副次的な矛盾がたくさんあって、時期によるとその副次的な矛盾のほうが重要になることもある。世の中の動きって、とにかく複雑だね。

たとえば、自由競争時代の資本主義は発展して帝国主義となるが、このときにも、プロレタリア階級とブルジョア階級という根本的に矛盾する二つの階級の性質およびこの社会の資本主義の本質は変化していない。だが、二つの階級の矛盾が激化し、独占資本と非独占資本とのあいだの矛盾が発生し、宗主国と植民地との矛盾が激化し、資本主義諸国間の矛盾、すなわち各国の発展の不均衡状態によってひきおこされた矛盾がとくにすくなくとも、資本主義の特殊な段階、すなわち帝国主義の段階が形成されたのである。レーニン主義が帝国主義とプロレタリア革命時代のマルクス主義となったのは、レーニンとスターリンが、これらの矛盾を正しく解明するとともに、これらの矛盾を解決するためのプロレタリア革命の理論と戦術を正しくつくりだしたからである。

一つの国の中でたくさんの企業家が出てきて自由に競争する。これが「自由競争時代の資本主義」である。ダーウィンが育った19世紀初頭のイギリスがそうで、したがってダーウィンの進化論は自由主義時代の資本主義を自然の生物に当てはめたものと言える。しかし人間社会では、自由競争は次第に自由ではなくなる。競争の必然的な結果として、少ない数の会社に整理されていくからである。今でも、個人商店は次第に大型スーパーマーケットに負けて消失しているのではないか。こうして独占資本が成立すると、一つの国の中ではいきづまり、今度は国と国の競争になる。同時に未発達な地方を植民地として支配していく。これが「資本主義の帝国主義時代」というわけである。第1次世界大戦は、そういった帝国主義諸国のぶつかったものだった。これを、矛盾の面から分析したのが、毛沢東のこの文章となる。

ついで毛沢東は、同じような分析を中国革命に当てはめていく。

辛亥（シンハイ）革命からはじまった中国のブルジョア民主主義革命の過程の状況について見ても、いくつかの特殊な段階がある。とくに、ブルジョア階級が指導した時期の革命とプロレタリア階級が指導する時期の革命とは、大きなちがいのある二つの歴史的段階として区別される。すなわち、プロレタリア階級の指導によって、革命の様相が根本的に変わり、階級関係の新しい配置、農民革命の大きなもりあがり、反帝国主義、反封建主義革命の徹底性、民主主義革命から社会主義革命への転化の可能性などがでてきた。これらすべては、ブルジョア階級が革命を指導していた時期には、あらわれることのできなかつたものである。過程全体をつらぬく根本的矛盾の性質、すなわち、過程の反帝・反封建の民主主義革命という性質（その反面は半植民地的、半封建的な性質）には、変化がないにもかかわらず、この長い時間のあ

いだには、辛亥革命の失敗と北洋軍閥の支配、第一次民族統一戦線の樹立と1924年から1927年までの革命、統一戦線の分裂とブルジョア階級の反革命への転移、新しい軍閥の戦争、土地革命戦争、第二次民族統一戦線の樹立と抗日戦争などの大きなできごとを経過し、この20余年のあいだにいくつかの発展段階を経過した。それらの段階には、一部の矛盾の激化（たとえば土地革命戦争と日本帝国主義の東北四省への侵略）、一部の矛盾の部分的あるいは一時的な解決（たとえば、北洋軍閥が消滅されたこととか、われわれが地主の土地を没収したこととか）、一部の矛盾のあらたな発生（たとえば、新しい軍閥のあいだのあらしとか、南方の各地の革命根拠地がうしなわれたのち、地主がふたたび土地をとりかえしたこととか）などの特殊な状況がふくまれている。

中世の封建主義から近代社会へ移るとき、たとえばフランス大革命のような変動が起こる。これが「ブルジョワ民主主義革命」であり、主導権はブルジョワ階級が握る。ターウインの進化論を支持したのも、当時イギリスに生まれ急速に力をつけてきたブルジョワ階級であった。ターウインに反対したのは、中世封建主義の名残りである国王・貴族・地主・教会である。こうして資本主義社会が成立する。その次に来るのが社会主義革命であるというのが、マルクス主義なのだが、ロシアでも中国でも、半封建、半植民地の状態、つまり資本主義をほとんど経過しないまま、社会主義革命に突入してしまった。現在、ロシアを初め、社会主義諸国が軒並み崩壊しつつあるのは、それが原因ではないだろうか、と、私はひそかに思っている。

事物の発展過程の、それぞれの発展段階における矛盾の特殊性を研究するには、その結びつきのうえで、その全体のうえでそれを見なければならぬばかりでなく、それぞれの段階における矛盾のそれぞれの側面から見なければならぬ。

国民党と共産党の両党に例をとろう。国民党の側についていうと、第一次統一戦線の時期には、連リ、連共、労農援助という孫中山（スンチヨンシャン）の三大政策を実行したので、それは革命的で生気にあふれ、諸階級の民主主義革命の同盟体であった。1927年以後、国民党はこれと正反対の側に変わり、地主と大ブルジョア階級の反動的集団になった。1936年12月の西安（シーアン）事変以後は、また、内戦を停止し共産党と連合してともに日本帝国主義に反対するという側に転じはじめた。これが三つの段階における国民党の特徴である。これらの特徴が形成されたのには、もちろんさまざまな原因がある。中国共産党の側についていえば、第一次統一戦線の時期には幼年の党であったが、1924年から1927年までの革命を勇敢に指導した。しかし、革命の性質、任務、方法についての認識の面では、その幼稚さがあらわれ、そのため、この革命の後期に発生した陳独秀（チェントウシウ）主義が作用をおこし、この革命を失敗させてしまった。1927年以後、中国共産党はまた、土地革命戦争を勇敢に指導し、革命の軍隊と革命の根拠地をつくりあげた。しかし、また冒険主義のあやまりをおかして、軍隊と根拠地に大きな損失をこうむらせた。1935年以後は、ふたたび、冒険主義のあやまりを是正して、新しい、抗日の統一戦線を指導するようになり、この偉大な闘争はいま発展しつつある。この段階では、共産党は二回の革命の試練をへた、豊富な経験をもった党となっている。これらが三つの段階における中国共産党の特徴である。これらの特徴が形成されたのには、やはりさまざまな原因がある。両党のこれらの特徴を研究しなければ、それぞれの発展段階での国共両党の特殊な相互関係、すなわち統一戦線の樹立、統一戦線の分裂および統一戦線の

再樹立を理解することはできない。そして、両党のさまざまな特徴を研究するためにより根本的なことは、この両党の階級的基礎と、それによってそれぞれの時期に形成された、両党と他の方面とのあいだの矛盾の対立とを研究しなければならないということである。たとえば、国民党が共産党と一回目に連合した時期には、国民党は、一方では外国帝国主義とのあいだに矛盾があったので、帝国主義には反対したが、他方では国内の人民大衆とのあいだに矛盾があったので、口先では勤労人民に多くの利益をあたえると約束しながら、実際には、ごくわずかの利益しかあたえなかったか、ぜんぜんなにもあたえなかった。そして、反共戦争をすすめた時期には、帝国主義、封建主義と協力して人民大衆に反対し、人民大衆が革命のなかでたたかいたすすべての利益をいっさいがっさい奪いと、人民大衆とのあいだの矛盾を激化させた。現在の抗日の時期には、国民党は、日本帝国主義とのあいだに矛盾があるので、一方では共産党と連合する必要にせまられているが、同時に共産党や国内の人民大衆にたいしては闘争と圧迫をゆるめていない。ところが共産党は、どんな時期にも、つねに人民大衆といっしょになって、帝国主義と封建主義に反対してきた。だが、現在の抗日の時期には、国民党が抗日を表明しているので、共産党は、国民党および国内の封建勢力にたいする政策を緩和した。これらの状況から、両党の連合あるいは両党の闘争が形成されたのであるが、たとえ両党が連合している時期でも、連合もし闘争もするという複雑な状況が存在するのである。もしわれわれが矛盾のこれらの側面の特徴を研究しないならば、われわれは、この両党がそれぞれその他の方面とのあいだにもっている関係を理解できないばかりか、両党のあいだの相互の関係も理解できない。

この部分を理解するには、この時代の中国の歴史を勉強しなければならない。私は勉強していないから解説するわけにはいかない。理解したい人は勉強してください。もっとも、ここで毛沢東が言っていることは、そう難しいことではない。歴史を共産党と国民党の間の矛盾・抗争ととらえ、共産党の側面と国民党の側面の両方から分析しているだけである。

こうした点からみて、どんな矛盾の特性を研究するにも、つまり物質のそれぞれの運動形態がもつ矛盾、それぞれの運動形態がそれぞれの発展過程でもつ矛盾、それぞれの発展過程でもつ矛盾のそれぞれの側面、それぞれの発展過程がそれぞれの発展段階でもつ矛盾、およびそれぞれの発展段階の矛盾のそれぞれの側面など、これらすべての矛盾の特性を研究するには、主観的任意性をおびてはならず、それらにたいして、具体的な分析をはなれては、どんな矛盾の特性も認識できない。われわれはつねに、具体的な事物について具体的な分析をせよというレーニンのことばを銘記しておかなければならない。

このような具体的な分析については、マルクス、エンゲルスが最初にわれわれにりっぱな手本をしめしてくれた。

マルクス、エンゲルスは、事物の矛盾の法則を社会の歴史的過程の研究に応用したとき、生産力と生産関係とのあいだの矛盾を見だし、搾取階級と被搾取階級とのあいだの矛盾、およびこれらの矛盾によってうまれる経済的土台と政治、思想などの上部構造とのあいだの矛盾を見だし、そしてこれらの矛盾が、それぞれ異なった階級社会で、どのように不可避免的に、それぞれ異なった社会革命をひきおこすかを見いだした。

マルクスは、この法則を資本主義社会の経済構造の研究に応用したとき、この社会の基本的矛盾が生産の社会性と占有の個人性のあいだの矛盾である

ことを見いだした。この矛盾はそれぞれの企業における生産の組織性と、社会全体における生産の無組織性とのあいだの矛盾としてあらわれる。この矛盾の階級的なあらわれがブルジョア階級とプロレタリア階級のあいだの矛盾である。

事物の範囲はきわめて広く、その発展は無限であるから、あるばあいには普遍性であったものが、他のばあいには特殊性に変わる。それとは逆に、あるばあいには特殊性であったものが、他のばあいには普遍性に変わる。資本主義制度にふくまれる生産の社会化と生産手段の私的所有制との矛盾は、資本主義が存在しまたは発展しているすべての国に共通するものであって、これは資本主義にとっては、矛盾の普遍性である。しかし、資本主義のこの矛盾は、階級社会一般が一定の歴史的段階に発展したときのものであって、階級社会一般での生産力と生産関係との矛盾からいえば、これは矛盾の特殊性である。しかし、マルクスが資本主義社会のこれらすべての矛盾の特殊性を解剖した結果、階級社会一般における生産力と生産関係との矛盾の普遍性はよりいっそう、より十分に、より完全に、あきらかにされた。

特殊な事物は普遍的な事物と結びついているので、また、一つ一つの事物の内部には矛盾の特殊性ばかりか、矛盾の普遍性もふくまれており、普遍性は特殊性のなかにこそ存在しているので、われわれが一定の事物を研究するばあいには、この二つの側面、およびその相互の結びつきを発見し、ある事物の内部にある特殊性と普遍性という二つの側面、およびその相互の結びつきを発見し、ある事物とそれ以外の多くの事物との相互の結びつきを発見しなければならない。スターリンはその名著『レーニン主義の基礎について』のなかで、レーニン主義の歴史的根源を説明するにあたって、レーニン主義のうまれた国際的環境を分析し、帝国主義という条件のもとですでに極点にまで発展した資本主義の諸矛盾と、これらの諸矛盾によってプロレタリア革命が直接的実践の課題になり、資本主義に直接突撃をくわえるよい条件がつくりだされたこととを分析している。そればかりでなく、かれはさらに、どうしてロシアがレーニン主義の発祥地になったかを分析し、帝政ロシアがその当時帝国主義のあらゆる矛盾の集中点となり、またロシアのプロレタリア階級が世界の革命的プロレタリア階級の前衛となることができた原因を分析した。このように、スターリンは帝国主義の矛盾の普遍性を分析して、レーニン主義が帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義であることを解明し、また帝政ロシアの帝国主義がこの一般的な矛盾のなかでもっていた特殊性を分析して、ロシアがプロレタリア革命の理論と戦術の誕生地となったこと、そして、この特殊性のなかに矛盾の普遍性がふくまれていることを解明している。スターリンのこの分析は、われわれに、矛盾の特殊性と普遍性、およびその相互の結びつきを認識する手本をしめしている。

マルクスとエンゲルス、おなじくレーニンとスターリンは、弁証法を客観的現象の研究に応用するばあい、主観的任意性をいささかもおひてはならず、かならず客観的な実際の運動にふくまれている具体的な条件から、これらの現象のなかの具体的な矛盾、矛盾のそれぞれの側面の具体的な地位および矛盾の具体的な相互関係をみいださなければならないことを、いつも教えている。われわれの教条主義者たちは、このような研究態度がないので、正しいことは何一つやれなかった。われわれは教条主義の失敗をいましめとして、このような研究態度を身につけなければならない。これ以外にはどんな研究方法もないのである。

毛沢東はマルクス主義者であり、マルクス主義を指導理念として中国革命の指導をして

いた。だからいたるところで、マルクス・エンゲルス・レーニン・スターリンの言葉を絶対正しいものとして引用をしている。しかし、引用部分の文章にはどうも精彩がない。毛沢東らしさが出ていないのである。毛沢東なる人物はそうとう八方破れの人で、けっこう無茶なことを言ったりやったりしたのだが、マルクスやレーニン、とくにスターリンをそれほど崇めていたとは思えない。どちらかと言えば、彼らの「権威」を利用していただろう。

最後に少し毛沢東らしさが出てくる。この節のまとめの文章である。

矛盾の普遍性と矛盾の特殊性との関係は、矛盾の通性と個性との関係である。通性とは、矛盾があらゆる過程に存在するとともに、あらゆる過程を始めから終わりまでつらにいていうことであり、矛盾とは、運動であり、事物であり、過程であり、また思想でもある。事物の矛盾を否定することはすべてを否定することである。これは共通の道理であって、古今東西をつうじて例外はない。したがって、それは通性であり、絶対性である。しかしながら、この通性はあらゆる個性のなかにふくまれており、個性がなければ通性はない。あらゆる個性をとりさったら、通性などあるだろうか。矛盾はそれぞれ特殊であるから、個性がうまれるのである。すべての個性は条件的、一時的に存在するものであり、したがって相対的である。

この通性と個性、絶対と相対との道理は、事物の矛盾の問題の真髄であって、これを理解しなかったら、弁証法を捨てたにひとしい。

矛盾の普遍性と特殊性を、毛沢東は、矛盾の「通性」と「個性」という日常の言葉で言い換える。さらにこれを、たとえば「人間」の通性と個性というように考えると分かり易い。

人間はホモ・サピエンスという種とされている。それは、人間には共通の性質、全ての人間が共通して持っている性質があるからである。たとえば、日本足であるき、手で道具を作り使い、言葉を話し、大きな脳で概念をあやつり思想を持つ、といったことがその通性である。人間である限りこういう性質は必ず持っているのだから、通性は絶対性といってもよい。

ところが、一人一人の人間を見ると、これが千差万別、今人間はおよそ50億人いるから50億別と言わなければならないが、とにかく一人づつみな違う。これが個性である。個性というのはその人独自のものであるから、その人が死ねば失われる。つまり条件的、一時的（せいぜい百年）なもので、したがって相対的なものである。

そこで問題は、どちらが基本的なものか、とすることになる。通性あつての個性なのかあるいは、個性あつての通性なのか？

18世紀のヨーロッパ、とくにドイツを中心にして自然哲学なる思想があつた。これを生物に当てはめたのが、原型という概念である。生物にはいくつかの原型（神様が創ったものらしい）があり、個々の生物はその原型の変形であると考えている。キュウイ工は動物を四つの原型に分けた。この考えは明らかに、通性が先で個性は後である。

原型を認めなければどうなるか。個々の生物を調べ、共通点を見つけだし、グループとする。ダーウィン以後の生物学ではそうすることになっている。つまり、現実具体的に存在するのは個性であり、通性は個性から抜き出されたものである。通性のみから成る生物は実際には存在しない。

毛沢東はここでも、個性を第一に考えている。個性がなければ通性はないのである。通性がなくても個性はある。初めて陸に上った両生類は通性のない個性である。子孫を増やしてやっと通性ができてきた。

個性は特殊性、相対性、個別性に通じる。通性は普遍性、絶対性、全体性である。われわれはどうしても、後者を重視する傾向にある。国家と国民は通性と個性だが、国家を重

視すれば、戦時中の日本がそうだったように、「国家主義」となる。国民を重視するのが「民主主義」である。普遍性、絶対性、全体性などの言葉に惑わされてはいけない。通性の中に個性があるのではなく、個性の中に通性が宿っているだけなのである。

矛盾の普遍性と特殊性を説明した毛沢東は、ついですでに少し触れていた、一つの過程の中にある多くの矛盾のなかで、主要な矛盾と主要でない矛盾を区別し、さらに主要な矛盾の二つの側面のうち、どちらが主要な側面であるかに注意しなければならないと説く。それが「主要な矛盾と矛盾の主要な側面」という節である。「矛盾の特殊性」という前の節もずいぶん長かったが、毛沢東はまだまだ終わらせてくれない。

四 主要な矛盾と矛盾の主要な側面

矛盾の特殊性という問題のなかには、とくにとりあげて分析する必要のある状況がまだ二つある。それは主要な矛盾と矛盾の主要な側面である。

複雑な事物の発展過程には、多くの矛盾が存在しているが、そのなかではかならず一つが主要な矛盾であり、その存在と発展によって、その他の矛盾の存在と発展が規定され、あるいは影響される。

たいていのものごとの発展過程には、いくつかの矛盾が含まれているのが常である。大学には教授と学生のほかに、助教授もいれば助手もいる。事務官や技官、それに非常勤職員も大学の構成員である。ああ、学長や学部長を忘れていた。教授と助教授はたいてい「矛盾」しているし、助手は教授・助教授と矛盾する。「子供の頃、『人のいやがることを進んでしよう』と教えられたのよ」と称して、教授や助教授のいやがることはかりしている助手も現存する。関係は複雑である。

たとえば、資本主義社会では、プロレタリア階級とブルジョア階級という二つの矛盾する力が主要な矛盾をなしており、それ以外の矛盾する力、たとえば、残存する封建階級と小ブルジョア階級との矛盾、小ブルジョア階級、農民とブルジョア階級との矛盾、プロレタリア階級と小ブルジョア階級、農民との矛盾、非独占ブルジョア階級と独占ブルジョア階級との矛盾、ブルジョア民主主義とブルジョア・ファシズムとの矛盾、資本主義国相互間の矛盾、帝国主義と植民地との矛盾、およびその他の矛盾はいずれも、この主要な矛盾する力によって規定され、影響される。

大学ではやはり、教授と学生との間の矛盾が主要矛盾であろう。助教授と助手の矛盾は、「この主要な矛盾する力によって規定され、影響される」副次的矛盾となる。教授と学生との間の主要矛盾が激化して学生運動が起これば、助教授と助手の矛盾などどこかへけし飛んでしまう。

半植民地国では、たとえば中国のように、その主要な矛盾と主要でない矛盾との関係が、複雑な状況を呈している。

帝国主義がこのような国にたいして侵略戦争をおこなっているときには、このような国の内部の各階級は、一部の売国分子をのぞいて、帝国主義に反対するために、一時的に団結して民族戦争をすすめることができる。そのときには、帝国主義とこのような国のあいだの矛盾が主要な矛盾となり、このような国の内部の各階級のあいだのあらゆる矛盾（封建制度と人民大衆との

あいだの矛盾というこの主要な矛盾もふくめて）は、いずれも一時的には副

次的な、また従属的な地位にさがる。中国では、1840年のアヘン戦争、1894年の中日戦争、1900年の義和団戦争および現在の中日戦争に、いずれもこのような状況がみられる。

かつて大学管理法案なるものが提案されたことがあった。そのときは、教授（一部だが）も学生も、助教授も助手も一致団結して文部省帝国主義に反対した。文部省差し回しの事務局長という「売国分子」は存在したが。最近では、教官も学生も全学挙げて、文部省が「3べん回ってワンと言え」と言ったら「4へん回ってワンワン」と言うような状況だから、矛盾も何もあったものではない。

しかし、別の状況のもとでは、矛盾の地位に変化がおこる。帝国主義が戦争によって圧迫するのではなくて、政治、経済、文化など比較的温和な形式をとって圧迫するばあいには、半植民地国の支配階級は帝国主義に投降するようになり、両者は同盟をむすんで、いっしょになって人民大衆を圧迫する。こうしたばあい、人民大衆はしばしば国内戦争の形式をとって帝国主義と封建階級の同盟に反対するが、帝国主義はしばしば、直接行動をとらずに間接的な方式で半植民地国の反動派の人民大衆への圧迫を援助する。そのため内部矛盾がとくにすどくあらわれてくる。中国の辛亥革命戦争、1924年から1927年までの革命戦争、1927年以後10年にわたる土地革命戦争には、いずれもこのような状況がみられる。また、たとえば中国の軍閥戦争のような、半植民地国のそれぞれの反動支配者集団のあいだの内戦も、こうした部類にぞくする。

なるほど、今の状況はこれだね。文部省の言い分の裏には、金（研究費）がついているしね。違うところは、「内部矛盾がすどくあらわれて」こない点で、「人民大衆」つまり学生も取り込まれてしまっているところだろうか。みんな金持だものね。

国内革命戦争が発展して、帝国主義とその手先である国内反動派の存在を根本からおびやかすようになると、帝国主義はしばしば上述の方法以外の方法をとって、その支配を維持しようとする。つまり、革命陣営の内部を分裂させたり、直接軍隊を派遣して国内反動派を援助したりする。こうしたとき、外国帝国主義と国内反動派とはまったく公然と一方の極にたち、人民大衆は他方の極にたつて、主要な矛盾を形成し、これがその他の矛盾の発展状態を規定するか、あるいはそれに影響をあたえる。十月革命後、資本主義諸国がロシアの反動派をたすけたのは、武力干渉の例である。1927年の蒋介石（チャンチェシー）の裏切りは、革命陣営を分裂させた例である。

教授が文部省に取り込まれ、昔のように学生が反乱を起こすと、学生陣営の内部を分裂させる策動が始まる。全国学園闘争は、だから、数え切れないほどのセクトに分かれてしまった。それでもなおがんばると、機動隊が投入されて、安田講堂は陥落する。

しかし、いずれにしても、過程の発展のそれぞれの段階で指導的な作用をおこすのは、主要な矛盾だけである。これはまったく疑いのないところである。

こうしたことからわかるように、どんな過程にも、もし多くの矛盾が存在しているとすれば、そのなかの一つはかならず主要なものであって、指導的な、決定的な作用をおこし、その他は副次的、従属的地位におかれる。したがって、どんな過程を研究するにも、それが二つ以上の矛盾の存在する複雑

な過程であるならば、全力をあげてその主要な矛盾を見いださなければならぬ。この主要な矛盾をつかめば、すべての問題はたやすく解決できる。これは、マルクスが資本主義社会を研究するさいわれわれに教えている方法である。また、レーニンとスターリンが帝国主義と資本主義の全般的危機を研究するさいにも、ソ連の経済を研究するさいにも、こういう方法を教えている。ところが、何千何万という学者や実行家は、こういう方法がわからないために、五里霧中におちいり、核心がみつからず、したがって矛盾を解決する方法もみつからない。

まず、主要矛盾をつかめ、というのが、毛沢東の言い分である。マルクスやレーニンがどんな主要矛盾をつかんだのか、それは知らない。もっとも、これはわれわれが複雑な現象を分析しようとするとき、常にやろうとしていること（やっていること、ではない）ではある。そこで何がいちばん問題なのか、ということにすぎない。

主要矛盾と副次的矛盾を区別した上で、毛沢東は次に、矛盾の側面を問題にする。どちらの側面が主要であるかということである。

うえにのべたとおり、過程のなかのすべての矛盾を同等にあつかってはならず、それらを主要なものと副次的なものとの二つの種類にわけ、主要な矛盾をつかむことに重点をおかなければならぬ。だが、さまざまな矛盾のなかで、主要なものであろうと、あるいは副次的なものであろうと、矛盾する二つの側面は、また同等にあつかってよいだろうか。やはりいけない。どんな矛盾であらうと、矛盾の諸側面は、その発展が不平衡である。あるばあいには、力が伯仲しているかのようにみえるが、それは一時的な相対的なものにすぎず、基本的な状態は不平衡である。矛盾する二つの側面のうち、かならずその一方が主要な側面で、他方が副次的な側面である。その主要な側面とは、矛盾のなかで主動的な作用をおこす側面のことである。事物の性質は、主として支配的地位をしめる矛盾の主要な側面によって規定される。

教授と学生との矛盾も、普段は圧倒的に教授側の側面が主要である。しかし、学生運動が発展すれば、主要な側面は学生側に移る。教官の権原である単位認定権まで学生が左右した例すらある。もっとも、助教授と助手の間の矛盾では、助教授側に主要な側面が回ってくることは滅多にない。わが生物学科では、私が来た25年前から現在まで、主要な側面はずっと助手側がにぎったままであった。

しかし、このような状況は固定したものではなく、矛盾の主要な側面と主要でない側面とはたがいに転化しあい、事物の性質もそれにつれて変化する。矛盾の発展する一定の過程あるいは一定の段階では、主要な側面がAの側にあり、主要でない側面がBの側にあるが、別の発展段階あるいは別の発展過程にうつると、その位置はいれかわる。これは、事物の発展のなかで矛盾する両側面の闘争している力の増減の度合いによって決定される。

われわれは「新陳代謝」ということばをよく口にす。新陳代謝は宇宙における普遍的な、永遠にさかろうことのできない法則である。事物自身の性質と条件によって、異なった飛躍の形式をつうじて、ある事物が他の事物に転化するのが新陳代謝の過程である。どんな事物の内部にも新旧両側面の矛盾があって、一連の曲折した闘争が形づくられている。闘争の結果、新しい側面は小から大に変わって支配的なものに上昇し、ふるい側面は大から小に変わってしだいに滅亡していくものになってしまう。新しい側面がふるい側面にたいして支配的地位をうると、すぐ、ふるい事物の性質は新しい事物の性質に変わる。このことからわかるように、事物の性質は主として支配的

位をしめている矛盾の主要な側面によって規定される。支配的地位をしめている矛盾の主要な側面が変化すれば、事物の性質もそれにつれて変化する。

「新陳代謝」というのはなつかしい言葉ではある。このごろは物質代謝という。生物は外界から物質を取り入れ、体内で化学変化を起こしてエネルギーを取り出して使い、残査をまた外界に吐き出す。それだけでなく、身体を作っている組織そのものの物質も入れ替える。肝臓を作っている物質は10日で半分入れ替わるそうだし、脳や骨でも3カ月だったか半年だったかで半分入れ替わるという。つまりわれわれの身体は、絶えず古いものを出し、新しいものと入れ替えているわけである。社会でもそうになっている、と毛沢東はいう。大学でも新しい世界的な研究者がたくさん入ってきて、ヒキガエルは何をしているか、というような古いことをやっている部分は、来年3月、排出されることになっている。「新陳代謝」には勝てないね。

資本主義社会では、資本主義がふるい、封建主義社会の時代におかれていた従属的地位から、すでに支配的地位をしめる勢力に転化しており、社会の性質もまた、封建主義的なものから資本主義的なものになっている。新しい、資本主義社会の時代には、封建的勢力はそれまで支配的地位におかれていた勢力から従属的勢力に転化し、そしてしだいに消滅していく。たとえばイギリス、フランスなどの諸国ではそうであった。生産力の発展にともなうて、ブルジョア階級は新しい、進歩的な役割をはたした階級から、ふるい、反動的な役割をはたす階級に転化し、最後にはプロレタリア階級にうちたおされて、私有の生産手段を収奪され、権力をうしなった階級に転化する。こうして、この階級もまた、しだいに消滅していくのである。人数のうえではブルジョア階級よりはるかに多く、しかも、ブルジョア階級と同時に生長しながら、ブルジョア階級に支配されているプロレタリア階級は、一つの新しい勢力であって、ブルジョア階級に従属していた初期の地位から、しだいに強大になって、独立した、歴史上主導的な役割をはたす階級となり、最後には権力をうばいとして支配階級になる。このとき、社会の性質は、ふるい、資本主義の社会から、新しい、社会主義の社会に転化する。これはソ連がすでにとおってきた道であり、他のすべての国もかならずとおる道である。

そうだそうだ、というわけで、われわれは学生時代、吉田内閣打倒に大いにがんばったものだが、時代は変わり、プロレタリア階級が権力を握って新しい社会に転化したはずのソ連が、また古い社会にもどってしまった。矛盾の解決に失敗して、主要矛盾の主要な側面が向こう側に移ってしまったのだろう。こういう現象を「反動」という。反動はいずれはまたもとへもどることにはなっている。もどらないかも知れないけどね。

中国の状況についていえば、帝国主義は、半植民地を形成しているという矛盾の主要な地位にたつて、中国人民を抑圧しており、中国は独立国から半植民地になっている。だが、ものごとはかならず変化する。双方がたたかっている情勢のなかで、プロレタリア階級の指導のもとに生長してきた中国人民の力は、かならず中国を半植民地から独立国に変え、帝国主義はうちたおされ、ふるい中国はかならず新しい中国に変わる。

毛沢東の予測はあたり、この論文からわずか8年で日本「帝国主義」はうちたおされ、10年後の1947年には新中国が成立した。そのあとは、もうひとつよろしくはないけれど。

古い中国が新しい中国に変わるということのなかには、さらに国内のふるい封建勢力と新しい人民勢力とのあいだの状況の変化ということがふくまれ

ている。ふるい封建的地主階級は、うちたおされ、支配者から被支配者に変わり、この階級もまたしだいに消滅していく。そして人民はプロレタリア階級の指導のもとで、被支配者から支配者になる。このとき、中国の社会の性質には変化がおり、ふるい、半植民地的半封建的な社会から、新しい、民主的な社会に変わる。

ふつうは、中世的封建社会が市民革命（ブルジョワ革命）によって資本主義社会になり、さらに社会主義革命によって社会主義国になる、ことになっている。中国は半封建、半植民地から、資本主義を抜かして、いきなり社会主義国になった。だから毛沢東は、次に来る新しい社会を、「民主的な社会」とぼやかしているのである。

このような相互転化は、過去にも経験がある。中国を三百年近く支配してきた清朝帝国は、辛亥革命の時期にうちたおされ、一方、孫中山の指導していた革命同盟会が一度は勝利をおさめた。1924年から1927年までの革命戦争では、共産党と国民党との連合による南方革命勢力が弱小なものから強大なものに変わって、北伐の勝利をおさめ、一方、一時権勢をほこった北洋軍閥はうちたおされた。1927年には、共産党の指導する人民の力は、国民党反動勢力の打撃をうけて小さくなったが、自己の内部の日和見主義を一掃することによって、またしだいに強大になってきた。共産党の指導する革命根拠地のなかでは、農民は被支配者から支配者に転化し、地主はそれとは逆の転化をとげた。世界では、いつもこのように、新陳代謝がおこなわれ、古い制度が廃されて新しい制度がうちたてられ、古い文化が淘汰されて新しいものをうみだすというように、新しいものが古いものにとって代わるのである。

「新しいものが古いものにとって代わる」というのは歴史の必然である。すべてのものは時間が経つと古くなり、新しく生まれてきたものにとって代わられる以外に道はないのではないか。毛沢東はここで、古いものは悪く、新しいものは善いとしているが、またそうしないと革命などはできないが、歴史は常にそうであるとは限らない。歴史の逆行は時々起こる。まあ、「古いもの」の強がりみたいなものだね。

革命闘争においては、困難な条件の方が順調な条件より大きいときがあり、そのようなときには、困難の方が矛盾の主要な側面で、順調の方が副次的な側面である。しかし、革命党員の努力によって、困難がしだいに克服され、順調な新しい局面がきりひらかれるので、困難な局面は順調な局面におきかえられる。1927年の中国革命失敗後の状況や、長征中の中国赤軍の状況などはみなそうである。現在の中日戦争でも、中国はまた困難な地位におかれているが、われわれはこのような状況をあらため、中日双方の状況に根本的な変化をおこさせることができる。逆の状況のもとでは、もし革命党員があやまりをおかせば、順調も困難に転化する。1924年から1927年までの革命の勝利は失敗に変わってしまった。1927年以後南方各省につくられてきた革命の根拠地も、1934年になると、みな失敗してしまった。

敵のほうの側面が強いときには、それなりの闘争の仕方がある。正面切った正規戦ではなく、グリラ戦に訴えなければならない。だから、どちらの側面が主要かという分析が大事になる。われわれが金沢大学理学部生物学科ですつとやってきた「闘争」では、そんな分析は必要ではなかった。常に主要な側面は教授側にあったからである。グリラ戦については毛沢東に、『遊撃戦論』というおもしろい論文がある。これは学生には教えなかった。利用して攻めてこられたらかなわないものね。要するに、「主要な側面」はどちらにある

かを正確に判断して、ケンカのやり方を決めるということである。相手かまわずケンカを吹っかけていては、長生きはできそうにない。もっとも、主要な側面は相手にありと思っても、たまにはケンカに勝つこともある。相手かまわずケンカするのも、一つのやり方も知らない、と、F女史と長らくつき合って、そう思うようになった。

学問を研究するばあい、無知から知への矛盾もまたそうである。われわれがマルクス主義を研究しはじめたときは、マルクス主義にたいして無知であるか、あるいはあまり知らないという状況と、マルクス主義の知識とは、たがいに矛盾しあっている。しかし、学習にはげむことによって、無知は有知に転化し、あまり知らないという状況は非常によく知っているという状態に転化し、マルクス主義にたいする盲目的状態はマルクス主義を自由に運用できる状態に変わる。

この辺もむずかしいところで、なまじ有知になると返ってよくないこともある。いつまでたっても無知でもこまるが、奥の深いものについては少々のことでは有知にはなれない。常に「自分はまだ無知だ」という自覚が必要で、だれかのように「ダーウィンについてはそうとうなことを知っている」などと言い始めると、もはや進歩はなくなる。まあ、そろそろ進歩しなくてもいい年齢ではあるが。狂子だったか老子だったかに、「有学無知」「無学有知」という言葉があつて、「学」と「知」を区別している。この「学」は、まあ「学歴」のようなものだと思えばいい。「有学無知」の典型はそこらに転がっているから、すぐに見つかるはずである。「京都大学を1、2を争って卒業した」などと威張っているのは、「有学無知」の極みと言えよう。

ある人は、一部の矛盾はそうではないと考えている。たとえば、生産力と生産関係との矛盾では生産力が主要なものであり、理論と実践との矛盾では実践が主要なものであり、経済的土台と上部構造との矛盾では経済的土台が主要なものであつて、それらの地位は、たがいに転化しあうものではないと考えている。これは弁証法的唯物論の見解ではなくて、機械論的唯物論の見解である。たしかに、生産力、実践、経済的土台は、一般的には主要な決定的な作用をするものとしてあらわれるのであつて、この点をもとめないものは唯物論者ではない。しかし、生産関係、理論、上部構造といったこれらの側面も、一定の条件のもとでは、逆に、主要な決定的な作用をするものとしてあらわれるのであつて、この点もまたみとめなければならない。生産関係を変えなければ、生産力が発展できないというばあい、生産関係を変えることが、主要な決定的な作用をおこす。レーニンがいったように「革命の理論がなければ、革命の実践もありえない」というばあいには、革命の理論の創造と提唱とが主要な決定的な作用をおこすのである。ある事（どんな事でもおなじであるが）をするにあたって、まだ方針、方法、計画あるいは政策をもたないばあいには、方針、方法、計画あるいは政策を確定することが主要な決定的なものとなる。政治や文化などの上部構造が経済的土台の発展をさまたげているばあいには、政治や文化の革新が主要な決定的なものとなる。われわれがこのようにいうのは唯物論にそむくだろうか。そむかない。なぜなら、われわれは、歴史の発展せんたいのなかでは、物質的なものが精神的なものを決定し、社会的存在が社会的意識を決定することをみとめるが、同時に、精神的なものの反作用、社会的意識の社会的存在にたいする反作用、上部構造の経済的土台にたいする反作用もみとめるし、またみとめなければならないからである。このことは唯物論にそむくのではなく、これこそ機械的唯物論におちいらず、弁証法的唯物論を堅持するものである。

経済的土台と上部構造というなつかしい言葉がでてきた。学生は親父のすねをかじっているくせに、マルクス主義の勉強をして頭だけ肥大している。経済的土台と上部構造が矛盾しているから信用できない、などによく言われたものである。マルクスは「存在（経済的土台）が意識（上部構造）を決定する」と言ったが、学生は「意識が存在を決定」しているわけである。存在が意識を決定することは確かであって、助教授になれば助教授らしくなり、教授になれば教授らしくなる人が大部分であろう。教授らしくない教授は極めて希である。しかし、極めて希でも、化学科の元教授S先生のように、教授になってもいっこうに教授らしくない教授が存在するということは、上部構造が経済的土台を支配することもありうることを示している。

矛盾の特殊性の問題を研究するにあたって、もし過程における主要な矛盾と主要でない矛盾、および矛盾の主要な側面と主要でない側面という、二つの状況を研究しないならば、つまり、矛盾のこの二つの状況の差異性を研究しないならば、抽象的な研究においちり、矛盾の状況を具体的に理解することはできず、したがって、矛盾を解決する正しい方法を見いだすこともできない。矛盾のこの二つの状況の差異性あるいは特殊性というのは、矛盾する力の不平衡性である。世界には絶対的に平衡に発展するものはなく、われわれは平衡論あるいは均衡論に反対しなければならない。同時に、矛盾のこうした具体的な状態、および発展過程における矛盾の主要な側面と主要でない側面との変化こそ、新しい事物がふるい事物にとってかわる力をあらわしている。矛盾のさまざまな不平衡な状況についての研究、主要な矛盾と主要でない矛盾、矛盾の主要な側面と主要でない側面についての研究は、革命政党が政治上軍事上の戦略戦術方針を正しく決定する重要な方法の一つであって、すべての共産党員が気をくばらなければならないところである。

主要な矛盾と矛盾の主要な側面、およびそれらの絶えざる変化という毛沢東のこの指摘は、ある状況を分析するとき、けっこう便利なものである。現状を変えてやろうと思うときにももちろん役に立つが、変える気はなくても、状況分析して楽しむこともできる。毛沢東の話はさらにつづく。今度は、弁証法でいう「対立物の相互浸透の法則」についてである。

五 矛盾の諸側面の同一性と闘争性

矛盾の普遍性と特殊性の問題を理解したならば、われわれはさらにすすんで、矛盾の諸側面の同一性と闘争性の問題を研究しなければならない。

矛盾とは、対立する反対の二つのもの間に生じるものである。だから、その対立性あるいは闘争性という性質は理解しやすい。しかし、矛盾対立している二つの側面が、実はお互い通じているということは、ちょっと分かりにくいかも知れない。見ず知らずの人にいきなりケンカを売るのはまずない。ケンカはむしろよく知っている人との間で起こる。同一性があるからこそ対立闘争が生じるのである。

同一性、統一性、一致性、相互浸透、相互依頼（あるいは依存）、相互連結、あるいは相互協力などといったこれらの異なったことばは、すべておなじ意味であって、つぎの二つのことをいっている。第一は、事物の発展過程における一つ一つの矛盾のもつ二つの側面は、それぞれ自己と対立する側面を自己の存在の前提としており、双方が一つの統一体のなかに共存しているということ、第二は、矛盾する二つの側面は、一定の条件によって、それぞ

れ反対の側面に転化していくということである。これが同一性といわれるものである。

レーニンはいつている。「弁証法とは、対立面がどのようにして同一であることができ、どのようにして同一であるのか（どのようにして同一となるのか）——それらは、どんな条件のもとで、同一であり、たがいに転化しあうのか——なぜ人間の頭脳はこれらの対立面を、死んだ、凝固したものとしてではなく、生きた、条件的な、可動的な、たがいに転化しあうものとして見なければならぬのか、ということについての学説である」

マルクスやレーニンを勉強しすぎると、毛沢東でもけっこう難しい言葉を使うようになる。でも、言っていることは簡単なことである。次に解説してくれる。

レーニンのこのことは、どういう意味なのだろうか。

あらゆる過程のなかで、矛盾しているそれぞれの側面は、もともと、たがいに、排斥しあい、闘争しあい、対立しあっている。世界のあらゆる事物の過程および人びとの思想には、すべてこのように矛盾性をおびた側面がふくまれており、それには一つの例外もない。単純な過程には一つの矛盾しかないが、複雑な過程には、一つ以上の矛盾がある。それぞれの矛盾のあいだも、またたがいに矛盾をなしている。このようにして、客観世界のあらゆる事物や人びとの思想が組み立てられ、またそれらに運動をおこさせている。

こういえば、きわめて不同一、きわめて不統一でしかないのに、どうしてまた同一あるいは統一というのか。

矛盾しているそれぞれの側面は、もともと孤立しては存在できないものである。もし、矛盾の一つの側面に、それと対をなす矛盾の側面がなかったら、それ自身も存在の条件をうしなってしまう。あらゆる矛盾している事物、あるいは人びとの心のなかで矛盾している概念の、いずれか一つの側面だけが独立して存在することができるかどうかを考えてみるがよい。生がなければ死はあられず、死がなければ生もあられない。上がなければ下というものではなく、下がなければ上というものもない。災いがなければ幸いというものではなく、幸いがなければ災いというものもない。順調がなければ困難というものではなく、困難がなければ順調というものもない。地主がなければ小作人はなく、小作人がなければ地主もない。ブルジョア階級がなければプロレタリア階級はなく、プロレタリア階級がなければブルジョア階級もない。帝国主義の民族抑圧がなければ植民地や半植民地はなく、植民地や半植民地がなければ帝国主義の民族抑圧もない。すべての対立的要素はみなこうであって、一定の条件によって、一方ではたがいに対立しあいながら、他方ではまたたがいに、連結しあい、貫通しあい、浸透しあい、依頼しあっている。このような性質が同一性とよばれるものである。すべての矛盾している側面は、一定の条件によって、不同一性をそなえているので、矛盾とよばれる。しかし、また同一性をそなえているので、たがいに連結しあっている。レーニンが弁証法とは「対立面がどのようにして同一であることができるか」を研究するものだといっているのは、つまりこのような状況についていったのである。どうしてそれができるか。たがいに存在の条件となっているからである。これが同一性の第一の意義である。

世の中のあらゆることは、正反対の側面が対になってできている。言葉もそれを反映して、たいいてい言葉にはその反対の言葉がついている。生と死、上と下、災いと幸い、順調と困難、などなど。いくつでも挙げることはできるが、一度自分で探してほしい。つま

り世の中には絶対と言うものがなく、すべて相対的にできあがっている、ということである。絶対的金持なるものは存在しない。貧乏人がいるから金持が生まれるのである。絶対的貧乏人はいそだね。私の部屋に、落ちこぼれた連中がたむろしていることがあった。私は彼らに言った。「君らにも存在意義はあるのだ。君らが存在しているおかげで、教授のもとでき嬉々として研究にはげんでいる連中が優等生になるんだよ」彼らはさすがに嫌な顔をした。そしてそのうち社会へ出ていった。そうとうひどい条件のところにお仕事したものが多いが、一人も帰ってこなかった。どんなにひどくとも、「あの部屋」にいるよりはましだ、と思ったのだろう。

しかしながら、矛盾する双方がたがいに存在の条件となり、双方のあいだに同一性があり、したがって一つの統一体のなかに共存することができるというだけで、十分だろうか。まだ十分ではない。問題は矛盾する双方がたがいに依存しあうことで終わるのではなく、いっそう重要なことは、矛盾している事物がたがいに転化しあうことにある。つまり、事物の内部の矛盾する両側面は、一定の条件によって、それぞれ自己と反対の側面に転化していき、自己と対立する側面のおかれていた地位に転化していくのである。これが矛盾の同一性の第二の意義である。

半封建社会であった当時の中国では、生まれながらにして社会的身分は決まっていた。地主の子は地主であり、小作人の子は小作人である。そして、それが4000年の昔から、4000年の未来にいたるまで、絶対に変わらないと思込んでいる者が大部分だったのである。日本でも江戸時代はそうだったし、明治になってからも封建主義の遺風がずっと残った。私たちが学生の頃の大学の民主化運動は、ほとんど反封建主義運動のようなものだった。そういう人たち相手に毛沢東は、そうではなくてものごとはすべて変化し、「自己の反対の側面に転化していく」ものなのだよ、と強調しているのである。今の若者も社会は今のまま固定して変わらないと思込んでいる。でもものごとは変わるのである。どっち向けにどのように変わるかは、最近よく分からなくなったが。それは、若者が受動的になって、社会が変われば変わった社会に適應するだけであり、社会を変えようという気持ちを失ってしまったからに違いない。

どうしてここにも同一性があるのか。見たまえ。被支配者であったプロレタリア階級は革命をつうじて支配者に転化し、もと支配者であったブルジョア階級は被支配者に転化していくというように、相手かたがもとめていた地位に転化していく。ソ連はすでにそうしたし、全世界もそうするにちがいない。もしそのあいだに、一定の条件のもとでの連係と同一性がなかったら、どうしてこのような変化がおこりえようか。

ソ連で起こった「転化」は、また逆に「転化」した。なぜそうなったか。そうなる「条件」が生じてしまったからで、条件が生じれば「転化」せざるを得ない。今資本主義は、何かに転化する条件を自分で作っているように思えるのだが、どうだろうか。それは、ソ連や中国や北朝鮮で現実化した社会主義ではないだろうが、基本的には「自由」よりも「平等」を基本にする社会であろうと、私はひそかに考えている。もっとも、あんまり早く転化すると、車を自由に乗り回している現在の生活ができなくなりそうだから、10年くらいは待つてほしいのだが。

中国近代史の一定の段階で、かつてある種の積極的役割をはたした国民党は、その固有の階級性と帝国主義からの誘惑（これらが条件である）によって、1927年以後、反革命に転化した。中国と日本との矛盾がすどくなっ

たことと、共産党の統一戦線政策（これらが条件である）によって、また抗日にやむなく賛成している。矛盾するものは一方から他方へ変わっていき、そのあいだには一定の同一性がふくまれている。

われわれの実行した土地革命は、土地を持っていた地主階級が土地を失った階級に転化し、土地を失っていた農民が、逆に、土地を手に入れて小所有者に転化する過程であったし、これからもそのような過程をふむだろう。持つことと持たないこと、また、得ることと失うことは、一定の条件によって、たがいに運結しあい、両者は同一性をもっている。農民の私有制は、社会主義という条件のもとでは、さらに社会主義的農業の公有制に転化する。ソ連はすでにそうしたし、全世界も将来はそうするにちがいない。私有財産と公有財産のあいだには、こちらからむこうに通ずる橋があり、哲学ではこれを同一性あるいは相互転化、相互浸透といっている。

例によって毛沢東は、中国の歴史、革命運動の経過を、「同一性」「相互転化」から分析・説明している。もっとも、あまり歯切れはよくない。毛沢東は、あとで説明するように、矛盾の同一性よりも闘争性のほうが好きらしい。

プロレタリア独裁あるいは人民の独裁を強化することは、まさに、こういう独裁を解消し、どんな国家制度も消滅させる条件を準備することである。共産党の指導する革命軍を創設して革命戦争をすすめることは、まさに、戦争を永遠に消滅させる条件を準備することである。これら多くのたがいに反しあうものは、同時にたがいに成りたたせあっているのである。

プロレタリア独裁とは、社会主義に移行するまでの間、一時的にプロレタリア階級が権力を握って独裁し、反革命に備えるという理論である。反革命勢力が粉碎され、社会主義政権が安定すれば、その時点で独裁は解消し、民主主義に移行することになっている。ところが、スターリンは、周りを資本主義社会に取り巻かれているという理由で、一時的であるはずの独裁をついに解消せず、いっそう強化してしまった。スターリン以後も、独裁が続き、おそらくこれが逆に、反革命を呼び起こした条件になったのだろう。独裁を消滅させるために独裁を強化し、戦争を無くすために戦争をする（革命戦争だが）というのは、弁証法的理屈としてあり得るが、現実にはみんな失敗しているようだね。

周知のように、戦争と平和はたがいに転化しあうものである。たとえば、第一次世界大戦は戦後の平和に転化し、中国の内戦もいまはやんで、国内の平和があらわれているように、戦争は平和に転化する。また、たとえば、1927年の国共合作は戦争に転化したし、現在の世界平和の局面も第二次世界大戦へ転化する可能性があるように、平和は戦争に転化する。どうしてそうなのか。階級社会では、戦争と平和というこの矛盾している事物が、一定の条件のもとで同一性をそなえているからである。

人間社会のもめ事を、武力で解決するのが戦争で、話し合いで解決するのが平和である。むずかしいことを言わなくても、戦争と平和が条件次第で転化することは当たり前の話ではある。そこで、武力を無くせば、もめ事が起こっても話し合う以外に道はないから戦争はなくなる、と考えたのが「日本国憲法第9条」で、そこにはこう書かれている。「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」つまり日本に関していえば、平和が戦争に転化できなくなったのである。敵が攻めてくればどうするか。双手を挙げて降参するのである。誇り高い毛沢東はいやがるだろうね。もっとも、現在日本は世界第3位と言われるほど、強力な軍備を持っている。しかしそれは、自衛隊であって軍隊ではないから、「陸海

空軍」ではない。また、軍隊ではないから「戦力」でもないのである。これはしかし、詭弁であって弁証法ではない。

毛沢東は、しかし、こういう形での平和は求めている。毛沢東の指導する革命勢力が武器を放棄すれば、たちまち国民党と日本帝国主義軍隊に制圧されてしまうからである。

矛盾しているすべてのものは、たがいに関係しあり、一定の条件のもとで一つの統一体のなかに共存していること、また一定の条件のもとではたがいに転化しあうこと、これが矛盾の同一性のもつ意義のすべてである。レニンが「どのようにして同一であるのか（どのようにして同一となるのか）――それらはどんな条件のもとで、同一であり、たがいに転化しあうのか」といっているのは、つまりこういう意味である。

朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）が攻めてくる。だから日本も軍備を持たなければならない、というのが、憲法改正、軍備強化論者の言い分である。毛沢東流に言えば、戦争と平和の同一性（平和）は必ず対立性に転化するというわけである。でも、彼らが毛沢東と違うところは、共存も対立も「一定の条件」のもとで行なわれるということである。彼らはしかし、その条件分析をしない。パトリオットミサイルを並べて北朝鮮を刺激するよりも、毎年お米を援助するほうが、戦争の条件をなくすはるかにいい方法だと思われる。原則は原則として、個別の具体的条件を分析せよ、というのが毛沢東の基本方針なのである。

「なぜ人間の頭脳はこれらの対立面を、死んだ、凝固したものとしてではなく、生きた、条件的な、可動的な、たがいに転化しあうものとして見なければならぬのか。」それは客観的事物が、もともとそうになっているからである。客観的事物のなかの矛盾している諸側面の統一あるいは同一性というものは、もともと死んだものでも、凝固したものでもなくて、生きた、条件的な、可動的な、一時的な、相対的なものであり、すべての矛盾は、一定の条件によって、自己と反対の側面に転化するものである。このような状況が、人間の思想に反映してマルクス主義の唯物弁証法的世界観となった。現在の、また歴史上の反動的な支配階級およびかれらに奉仕する形而上学だけが、対立した事物を、生きた、条件的な、可動的な、たがいに転化しあうものとして見ずに、死んだ、凝固したものとして見、しかも、このようなあやまった見方をいたるところで宣伝し、人民大衆をまどわしている。これはかれらの支配をつづけるという目的を達成するためである。共産党員の任務は、反動派や形而上学のあやまった思想を暴露し、事物本来の弁証法を宣伝し、事物の転化をうながし、革命の目的をたつすることである。

ここは、『実践論』の復習である。世の中のすべてのものが矛盾し、運動している。それを正確に頭脳に反映すると、人間の思想も矛盾し運動することになる。だから人間にできることは、自分の頭脳を社会に当てはめるのではなくて、社会に起こっていることを正確に認識することだ、という、ごく当然の話である。それを毛沢東は、中国の神話や伝説を例にして解説する。

一定の条件のもとでの矛盾の同一性とは、つまり、われわれのいう矛盾が、現実的な矛盾、具体的な矛盾であり、しかも、矛盾の相互転化も現実的、具体的であるということである。神話のなかの多くの変化、たとえば『山海経（せんがいきょう）』のなかの「夸父（かほ）が太陽を追いかけた」話、『淮南子（えなんじ）』のなかの「げいが九つの太陽を射た」話、『西遊記』

のなかの孫悟空の72変化、また、『聊齋志異（りょうさいしい）』のなかにてでくる多くの幽霊やきつねが人にばける話など、こういう神話のなかでいわれている矛盾の相互変化は、無数の複雑な現実的矛盾の相互変化が、人びとに引きおこさせた一種の幼稚な、想像の、主観的幻想の変化であって、具体的矛盾があらわした具体的変化ではない。マルクスはいつている。「すべての神話は、想像のなかで、かつ想像をつうじて、自然力を征服し支配し形象化する。したがって、それらは、自然力が実際に支配されていくにつれて消失する。」このような神話のなかの（さらに童話のなかの）千変万化の物語は、人間が自然力を制服することなどを想像しているので、人びとをよるこぼせることができるし、しかも、もっともよい神話は「永遠の魅力」（マルクス）さえもっているが、神話は、具体的矛盾をかたちづくる一定の条件にもとづいて構成されたものではないから、科学的に現実を反映したものではない。つまり、神話あるいは童話のなかの矛盾を構成する諸側面は、具体的な同一性ではなく、幻想的な同一性にすぎない。現実の変化の同一性を科学的に反映したもの、それがマルクス主義の弁証法である。

毛沢東はけっこう、神話や伝説が好きみたいだね。『三国志演義』や『水滸伝』も好きらしいが。「北朝鮮が攻めてくる」というのも、どうやら幼稚な想像の域を脱していないようである。これを「主観的幻想」と言う。

なぜ、鶏の卵はひよこに転化できるのに、石ころはひよこに転化できないのか。なぜ戦争と平和は同一性をもっているのに、戦争と石ころは同一性をもっていないのか。なぜ人間は人間を生めるだけで、ほかのものを生むことができないのか。それはほかでもなく、矛盾の同一性の存在は、一定の必要な条件のもとでなければならぬからである。一定の必要な条件がなければ、どんな同一性も存在しない。

ここで毛沢東は、一時的・条件的なもの、普遍的・絶対的なものとの関係を論じ始める。これは前に取り上げられた、矛盾の普遍性と特殊性の関係と同じものである。矛盾が存在するということは普遍的・絶対的であり、それぞれの具体的な矛盾の存在は一時的・条件的なのである。そして、普遍性の中に特殊性が包含されるのではなく、特殊性の中に普遍性が存在するというのが、毛沢東の主張であった。なぜなら、一時的・条件的なものだけが現実存在しているからである。

なぜ、ロシアでは1917年2月のブルジョア民主主義革命が同年10月のプロレタリア社会主義革命に直接つながっていたのに、フランスのブルジョア革命は社会主義革命に直接つながることがなく、1871年のパリ・コミュンは失敗に終わったのか。なぜ、モンゴルや中央アジアの遊牧制度が社会主義に直接つながったのか。なぜ、中国の革命は、西洋諸国のおつた歴史的なふるい道をとる必要がなく、ブルジョア独裁の時期をへる必要がなく、資本主義の前途をさけることができ、社会主義に直接つながることができるのか。ほかでもなく、これらはすべてそのときの具体的な条件によるのである。一定の必要な条件がそなわってれば、事物発展の過程には、一定の矛盾がうまれ、しかも、この、あるいはこれらの矛盾は、たがいに依存しあうし、またたがいに転化しあうのであって、それがなければ、すべては不可能である。

資本主義を経過せず、いきなり社会主義革命を行なったロシアや中国は、そうなるよう

な「具体的な条件」があったのだ、と毛沢東は言う。ソ連の崩壊のずっと前の話だが、ある友人がこんなことを言った。「ロシア革命はほんとうに社会主義革命なんだろうか。あれは天才レーニンが偉すぎて、起こるはずのないところで起こってしまった革命ではないだろうか」彼は、レーニンをついだスターリンの独裁振りを見てそう思ったらしいのだが、ソ連の余りにもあっけない崩壊とその後のロシアの混乱は、彼の疑いを証明しているように思える。中国では事情はそうとう異なるが、半植民地・半封建の後進中国がいきなり社会主義に飛んでしまったことは同じである。それには毛沢東の天才が必要だったに違いない。ロシア・中国の社会主義革命の「具体的条件」とは、天才的革命指導者がいたということか。こんなこと言っていると、毛沢東に怒られそうだね。

レーニンはいっている。「対立面の統一（一致、同一、同等作用）は条件的、一時的、経過的、相対的である。たがいに排斥しあう対立面の闘争は、発展、運動が絶対的であるように、絶対的である。」

レーニンのこのことばは、どういう意味だろうか。

すべての過程には始めと終わりがある。すべての過程は自己の対立物に転化する。すべての過程の常住性は相対的であるが、ある過程が他の過程に転化するという変動性は絶対的である。

矛盾する二つの側面は常に「対立」している。別の言葉で言えば、ものごとはすべて対立している二つの側面からできていて、その間に矛盾がある。ただし、その対立している側面はお互いに選じあっていて、統一することがある。その統一は一時的、相対的なもので、いずれは破れ闘争が起こる。

どんな事物の運動も、みな二つの状態、すなわち相対的に静止している状態と著しく変動している状態をとる。二つの状態の運動は、いずれも、事物の内部にふくまれる二つの矛盾する要素の相互の闘争によって引きおこされる。事物の運動が第一の状態にあるときは、量的変化があるだけで、質的变化はないので、あたかも静止しているような様相を呈する。事物の運動が第二の状態にあるときは、それはすでに、第一の状態での量的変化がある最高点にたっし、統一物の分解を引きおこして、質的な変化が発生したので、著しく変化している様相を呈するのである。われわれの日常生活に見られる統一、団結、連合、調和、均整、対峙、膠着、静止、恒常、平衡、凝集、吸引などはすべて事物が量的変化の状態にあるときに呈する様相である。そして、統一物が分解し、団結、連合、調和、均整、対峙、膠着、静止、恒常、平衡、凝集、吸引などといった状態がやぶれて反対の状態に変わるのは、みな事物が質的变化をしている状態のなかで、一つの過程から他の過程に移行する変化のなかで呈する様相である。事物は第一の状態から第二の状態にたえず転化するものであり、矛盾の闘争は、この二つの状態のなかに存在するとともに、第二の状態をへて矛盾の解決にたつするものである。したがって、対立面の統一は一時的な相対的なものであるが、対立面がたがいに排除しあう闘争は絶対的であるというのである。

文化大革命の初期、「一をもって二となす」のが正しいか、「二をもって一となす」のが正しいか、という哲学論争が生じた。前者は対立面の闘争を重視し、後者は対立面の統合を重視する考え方であるらしい。革命の最中はもちろん、「一をもって二となす」派が多かった。ケンカの中で統一を求めていたらケンカにならないからである。しかし、革命が成功し権力を握ると、考え方は変わってくる。「二をもって一となす」派が増えてきたのである。ところが毛沢東は、断乎として「一をもって二となす」を支持した。そして

文化大革命を引き起こしてしまった。毛沢東は、きわめてきびしい永久革命論者であり、「新王朝」の初代「皇帝」に就任しながら、まだ対立面の闘争、つまり革命を求め続けたのである。人間はいかなる状況にあっても闘争していなければ墮落する、と考えていたに違いない。

敗戦直後、外地から多くの軍人が復員してきた。私の身近な復員軍人から話を聞いて、一つ気がついたことがある。それは、ソ連軍に捕まり、シベリアへつれていかれた人は例外なく、ソ連人のモラルの低さを批判した。「ソ連人は、上下のへだたりなく、みんな悪い奴だ」ところが、中国で八路軍（共産軍）に捕まった人はみんな、「八路軍は強い」とは言っても「八路軍は悪い」とは言わなかった。同じ共産主義国家でありながら、どうしてこのように違うのだろう、と私はいろいろ考えたことがある。まだ高校生の頃であった。そして、天才レーニンに指導されたロシア革命は、上のほうで政権を奪取した一種のクーデターのようなもので、広くロシアの大衆を巻き込んではいなかったが、毛沢東の中国革命は、大衆の中から起こり、大衆自身が行なったものであって、だからモラルが高いのだろう、というのが私の結論だった。毛沢東の同志であり、中国人民解放軍総司令官であった朱徳の伝記『偉大なる道』（岩波文庫）を書いたアグネス・スメドレーを読んでいたせいもある。

でも、それよりも大きな理由があると、その後思うようになった。それは、ロシア革命はすでに30年前のこと、中国革命は当時進行中であった。人間は革命をやっていると精神が高揚する。モラルも高まるのである。その中国だって革命後50年、そうとうモラルは緩んでいるようだ。毛沢東はきっとそれを見通していたのだろう。だから文化大革命をわざわざ起こしたりした。あんまりうまくいかなかったようだが。

毛沢東の言うことは正しいとは思いが、一生闘争では身が持たないね。

われわれはさきに、たがいに反しあう二つのもののあいだには同一性があり、したがって、二つのものは、一つの統一体のなかに共存することができるし、またたがいに転化しあうことができるといったが、これは条件性のことで、つまり一定の条件のもとでは矛盾するものは統一することができるし、またたがいに転化しあうことができるが、この一定の条件がなければ、矛盾となることができず、共存することができず、転化することもできないということである。一定の条件によって矛盾の同一性が構成されるので、同一性は条件的であり、相対的であるというのである。われわれはまた、矛盾の闘争は、過程の始めから終わりまでをつらぬいていると同時に、一つの過程を他の過程に転化させており、矛盾の闘争の存在しないところはないといっている。したがって、矛盾の闘争性は無条件的であり、絶対的である。

個々具体的な矛盾、運動、事柄はすべて条件的である。条件によって共存もすれば闘争にもなる。何かを変えようと思えば、だから、具体的な条件を調べることが最も大切となる。条件が変わらなければものごとは変わらない。教授と学生の「共存」の条件を変えようといういろいろやってきたが、なかなか変わらなかった。みんな金持だものね。

条件的な、相対的な同一性と、無条件的な、絶対的な闘争性とが結合して、あらゆる事物の矛盾の運動を構成する。

われわれ中国人がつねにいう「たがいに反しあいながら、たがいに成りたせあう」とは、たがいに反しあうものが同一性をもっているという意味である。このことは、形而上学とは反対の、弁証法的なものである。「たがいに反しあう」とは、矛盾する二つの側面がたがいに排斥しあい、あるいはたがいに闘争しあうことをいう。「たがいに成りたせあう」とは、矛盾する二つの側面が、一定の条件のもとで、たがいに連結しあって同一性を獲得

することをいう。闘争性は同一性のなかにやどっており、闘争性がなければ、同一性はない。

ここでも毛沢東は、常識と反対のことを言う。矛盾の闘争性が無条件的・絶対的なものなら、条件的・相対的な同一性はそのなかに含まれそうなものだが、反対に、同一性のなかに闘争性は宿っている、と言う。普遍性と特殊性の関係と同じである。

つまり、現実存在するものはすべて一時的・条件的・相対的なものであり、そのなかにこそ、永久的・無条件的・絶対的なものが含まれているのである。個々の生物はいずれは死ぬが、生物自体はずっと存続する。そのようなものである。

教授と学生の共存は一時的なものであって、いずれは闘争に転化する。と思いながら25年待ったが、一向に転化しなかった。そのうち転化するだろう。今度はヤジウマで、外から見物させてもらうことにしよう。あの世からかな。

同一性のなかには闘争性が存在し、特殊性のなかには普遍性が存在し、個性のなかには通性が存在している。レーニンのことばをかりていえば、「相対的なもののなかに絶対的なものがある」のである。

こういう見方で世の中を見ると、けっこうおもしろいよ。生物を見るにも必要な視点だね。一般理論から出発するのではなく、ヒキガエルから出発しなければならない、ということが分かってくる。出発しただけで終わってしまったけど。

さて、『矛盾論』もいよいよ最終段階に入る。矛盾している二つの側面は、年から年中ケンカしているわけではなく、統一したり対立したりを繰り返している。その対立も、共存可能な対立から不可能な対立まで変化する。共存不可能な対立を、敵対的矛盾と称する。

六 矛盾における敵対の地位

矛盾の闘争性という問題には、敵対とはなにかという問題がふくまれている。われわれの答えは、敵対とは、矛盾の闘争形態のすべてではなく、矛盾の闘争形態の一つにすぎない、ということである。

人類の歴史には階級的な敵対が存在する。これは矛盾の闘争の特殊なあらわれである。搾取階級と被搾取階級のあいだの矛盾についていうと、奴隷社会でも、封建社会でも、資本主義社会でも、たがいに矛盾しあう二つの階級は、長期にわたって一つの社会のなかに並存し、たがいに闘争しあっているが、二つの階級の矛盾が一定の段階に発展したとき、はじめて双方は外面的な敵対の形態をとり、革命になるのである。階級社会では、平和から戦争への転化も、やはりこうである。

矛盾はどこにでも存在するのだが、矛盾があるからといって常に両者は敵対し、戦争するわけではない。ある条件が整ったとき、両者は敵対する。

爆弾がまだ爆発しないうちは、この矛盾物が一定の条件によって一つの統一体のなかで共存しているときである。新しい条件（発火）があらわれたとき、はじめて爆発をおこす。最後に外面的な衝突の形態をとって、ふるい矛盾を解決し、新しい事物をうみだす自然界の現象には、すべてこれと似た状況がある。

中生代の海に全骨類という硬骨魚類がいた。そのなかから、さらに進歩した真骨類とい

う硬骨魚類が現れる。おなじ硬骨魚類の中で、違った（矛盾した）二つのグループが出てきたことになる。しかし、初めのうちは真骨類の数は少なく、両者は共存する。次第に真骨類が増えてくると、同じ生活場所をめぐる両者は争い始め、白亜紀にいたって真骨魚は全骨魚のすべての生活場所を奪ってしまう。共存可能な矛盾の対立が、敵対的な地位に進んだのである。そして全骨類が減び、真骨類の天下となって矛盾は解決する。

このような状況を認識することは、きわめて重要である。それはわれわれの階級社会では、革命と革命戦争が不可避であり、それなしには、社会発展の飛躍を達成することもできなければ、反動的支配階級をうちたおして人民に政権を獲得させることもできない、ということを理解させるものである。共産党員は、反動派のいつている、社会革命は不必要だとか不可能だとかいう欺瞞的な宣伝を暴露し、マルクス・レーニン主義の社会革命の理論を堅持しなければならず、人民に、社会革命はぜひ必要であるばかりでなく、まったく可能であり、全人類の歴史とソ連の勝利がこの科学的な真理を証明していることを理解させなければならない。

革命には、平和的革命（たとえば議会で多数を占める）と暴力革命とがある。毛沢東は暴力革命主義者であり、共存可能な矛盾は必ず敵対的な矛盾に変化すると確信していた。ここは、平和革命志向者への批判として、矛盾の敵対論を使っている。

一方、革命内部において、共存可能な対立を敵対的な矛盾と見誤ることをも批判する。

だが、われわれは、さきにのべた公式をすべての事物にむりやりにあてはめてはならず、矛盾のさまざまな闘争の状況について具体的に研究しなければならない。矛盾と闘争とは普遍的であり、絶対的である。矛盾を解決する方法、すなわち闘争の形態は、矛盾の性質のちがいによって異なる。一部の矛盾は、もともと非敵対性であったものから敵対性のものに発展し、また、一部の矛盾は、もともと敵対性であったものから非敵対性のものに発展する。

まえにのべたように、共産党内の正しい思想とあやまった思想との矛盾は、階級が存在しているときには、階級的矛盾の党内への反映である。この矛盾は、はじめのうちとか、あるいは個々の問題では、すぐに敵対性のものとしてあらわれとはかぎらない。だが、階級闘争が発展するにつれて、この矛盾も敵対性のものに発展する可能性がある。ソ連共産党の歴史は、われわれに、レーニンやスターリンの正しい思想とトロツキーやブハーリンなどのあやまった思想との矛盾が、はじめのころはまだ敵対的な形態となってあらわれはしなかったが、のちには敵対的なものに発展したことを教えている。中国共産党の歴史にも、こうした状況があった。わが党内の多くの同志の正しい思想と陳独秀、張国燾（チャンクオタオ）らのあやまった思想との矛盾は、はじめのころは、やはり、敵対的な形態となってあらわれはしなかったが、のちには、敵対的なものに発展した。現在わが党内の正しい思想とあやまった思想との矛盾は、敵対的な形態となってあらわれてはならず、もし、あやまりをおかした同志が自分のあやまりをあらためることができるならば、それは敵対性のものにまで発展することはない。したがって、党は、一方ではあやまった思想にたいして、きびしい闘争をすすめなければならないが、他方ではまた、あやまりをおかした同志に目ざめる機会を十分あたえるようにしなければならない。このようならば、いきすぎの闘争はあきらかに不適当である。しかし、あやまりをおかした人がそのあやまりを固執し、さらに拡大させていくならば、この矛盾は、敵対性のものに発展する可能性がある。

革命でも学生運動でも、内部分裂はつきものである。相互批判で解決できる矛盾を殺しあいにまで発展させることが多い。これは、毛沢東に言わせれば、敵対的でない矛盾を敵対的だと誤解するところから生じる。だから、具体的な矛盾の分析が必要となる。スターリンとトロツキーとの矛盾は、確かに「敵対的」になったが、どちらが正しかったかは分からない。弁証法はものごとの動きを分析するだけで、正邪善悪の判断はしないのである。

経済面での都市と農村との矛盾は、資本主義社会においては（ここではブルジョア階級の支配する都市が農村を残酷に収奪している）、また中国の国民党支配地区においては（ここでは外国の帝国主義と自国の買弁の大ブルジョア階級の支配している都市が農村にたいして野蛮きわまる収奪をしている）、きわめて敵対的なものである。だが、社会主義国では、またわれわれの革命根拠地では、このような敵対的矛盾が非敵対的矛盾に変わっており、そして、共産主義の社会になったときには、このような矛盾は消滅する。

レーニンはいっている。「敵対と矛盾とは、まったく異なったものである。社会主義のもとでは、前者は消失するだろうが、後者は存続するだろう。」これはつまり、敵対とは矛盾の闘争形態のすべてではなく、その形態の一つにすぎないから、この公式をどこにでもあてはめてはならないということである。

矛盾はどこにもある。しかし、常に敵対的であるとは限らず、共存可能な矛盾も多い。もっとも、それはいつ何時敵対的になるかも知れない。矛盾とは変幻自在でやっかいなものだね。

最後に毛沢東は、結論を述べる。これまで書いてきたものの要約だが、きわめて簡潔にわかりやすく述べられているので、説明はいらないだろう。

七 結 論

ここで、われわれはつぎのようにまとめることができる。事物の矛盾の法則すなわち対立面の統一の法則は、自然および社会の根本法則であり、したがって思惟の根本法則でもある。それは形而上学の世界観とは正反対のものである。それは人類の認識史における一大革命である。弁証法的唯物論の観点からみると、矛盾は客観的事物および主観的思惟のすべての過程に存在しており、すべての過程の始めから終わりまでをつらぬいている。これが矛盾の普遍性と絶対性である。矛盾している事物およびその一つ一つの側面はそれぞれ特徴をもっている。これが矛盾の特殊性と相対性である。矛盾している事物は、一定の条件によって同一性をもっており、したがって、一つの統一体のなかに共存することができるし、またたがいに反対の側面に転化していくことができる。これもまた矛盾の特殊性と相対性である。しかし、それらが共存しているとでもたがいに転化しあうときには、闘争が存在しており、矛盾の闘争は絶えることがない。とくにたがいに転化しあうときには、闘争がいつそはつきりとあらわれる。これもまた矛盾の普遍性と絶対性である。われわれが矛盾の特殊性と相対性を研究するばあいには、矛盾および矛盾の側面の、主要なものと主要でないものとのちがいに注意しなければならず、矛盾の普遍性と闘争性を研究するばあいには、矛盾のさまざまな異なった闘争形態のちがいに注意しなければならない。そうしなければ、あやまりをおかすだろう。もし、われわれが研究をつうじて、うえにのべた諸要点をほんとうに理解したならば、われわれは、マルクス・レーニン主義の基本原則にそむいた、われわれの革命事業にとって不利な教条主義諸思想をうちやぶる

ことができるし、また、経験をもっている同志たちに、その経験を原則性を持つように整理させて、経験主義のあやまりをくりかえさせないようにすることもできる。これらのことが矛盾の法則を研究して得たわれわれの簡単な結論である。

ここまで読んで来られて—そういう方がもしおられたとしての話だが—どんなことを感じられたらうか。

私たちは、いずれにせよ何かの固定観念をもってものごとを判断している。先生の教えることを絶対だと信じて大学に合格した学生は、特にそうである。そして、最も悪いことは、自分が固定観念で生きているということ、自覚していないことである。

毛沢東は、『実践論』で、自分自身の実践がいかに大切であるかを説いた。『矛盾論』では、自分の持つ固定観念をいかに壊していくかが説かれている。それは、自分の経験で得たものを土台に、自分でものごとを考えていく、ということである。要するに、柔軟な思考を毛沢東は勧めている。

簡単なやり方がある。それは、誰か（特に偉い人）が何か言った場合、その反対を考えてみることである。毛沢東流に言えば、矛盾のもう一つの側面を見つけることになる。そうすると、不思議なことに、その偉い人の言ったことの本音が分かる。「おれの言う通り研究するのがおまえのためだよ」と言いながら、彼はそのデータで論文を書き、業績を挙げるのである。この癖を身につけると、社会のいろいろなことがだんだん分かってくるようになる。もっとも、分かっただけであまり言わないほうがいい。言うとしまいには、私のようになること請け合いである。まあ、本当は、自分で言っていじめられないと、本当には分からないのだが。

というわけで、固定観念の壊れた皆さんがどうするか、それは皆さんの自由であり、私は責任を持たない、というところで、毛沢東『矛盾論・実践論』を終えることにしよう。

『日本生物学会誌』バックナンバーあります

ご希望の号数を書いて本部までお知らせください
先着順でお送りします。

ただし、なくなっている号もいくつかありますから
ご希望にそえない場合もあります。

送料はそちらの負担です。

送られてきた封筒にはってある切手を見て
折り返しご送金ください。

(余ってしょうがないのでね)

奥野良之助

ダーウィンは、ここで交雑の話をする。地つづきの隔離されていないところで種分化させるためには、変種間の交雑を防がなければならない。自然選択による新種の起原を説くにはそのことの説明が不可欠だと思うが、ここでのダーウィンの交雑の話は、そうではない。ダーウィン自身が脇道と書いているように、自然選択による種分化とは直接関係のない話である。くたびれた人はとぼしてもかまわない。

個体間の交雑について—ここでちょっと、わき道にはいらねばならない。雌雄の性のわかれた動植物では、子がうまれるごとにかならず二個体がまじわらねばならないことは、いうまでもなく明らかなことである。しかし雌雄同体の場合には、このことは明白であるというわけにはいかない。とはいえ私は、すべての雌雄同体のもので二個体がときたまあるいは習性的に、子を生じるためにまじわることを信じるがわに、つよくかたむいている。付言すれば、この見解は、最初アンドリュウ・ナイトによって、のべられたものである。すぐあとで、その重要性について知ることになる。ただ私はここで、十分な議論をするにたりるだけの資料を用意してはあるが、きわめて簡単にとりあつかうにとどめねばならない。全脊椎動物、全昆虫類、そのほかいろいろの大きな動物群では、子がうまれるごとに交雑がなされる。最近の研究によって、雌雄同体と想像されていたものの数がずっとへり、また真の雌雄同体動物でも交雑するものが多数ある。つまり二個体が生殖のため規則的にまじわるのであって、われわれがいま問題にしているのは、そのことなのである。しかしたしかに習性的には交雑しない雌雄同体動物もたくさんいるし、また植物の大多数は雌雄同体である。そこで、つぎのことが問われるであろう。すなわち、これらの場合において二個体が生殖のためにつねにまじわると想像されるような理由が、どこかにあるであろうか。ここで詳細に立ちいるのは不可能なので、若干の一般的考察にとどめておくほかはない。

ダーウィンが予測している通り、現代では雌雄同体の動物のほぼすべてが、交雑することがわかっている。原生動物でも時に接合して、核の内容物を交換する。

まず第一に、私は、育種家のあいだでほとんど普遍的である信念と合致してつぎのようなことがらを示す、きわめて多数の事実をあつめた。それは、動物でも植物でもちがった変種間、あるいは変種はおなじだが系統を異にした個体間の交雑では、強壯で多産な子孫が生じること、他方、近親間の同系交配では強壯性と多産性が減少すること、そしてこれらの事実だけでも、どんな生物も子孫を永続させるために自家受精するのではないというのが自然界の一般的法則(われわれは法則の意味についてはまったく無知なのであるが)であって、他の個体との交雑が、ときどき—たぶん非常にながい間隔をおいて—おこなわれねばならないということを、私に信じさせるということである。

雑種強勢と近親交配の害ということで、ここでもダーウィンの予測はあたっている。「自然は自家受精をきらう」というのがダーウィンの考えだった。

これが自然界の法則であると信じるならば、他の見解ではどうしても説明できないつぎのような多種類の事実を、それにもとづいて理解することができるであろう。雑種の育成者はだれでも、花をしめらすのは受精のためによくはないことを知っているが、いかに多くの花が葯と柱頭とを露出させていることであろうか。ところで、ときどきの交雑が不可欠のことであるとすれば、他の個体から花粉が完全に自由にはいつてこられるということで、この露出の状態を説明することができるであろう。それぞれの植物自身の葯と雄しべは、自家受精がほとんど不可避と思われるほど近接しているのがふつうなので、とくにこの説明がなりたつのである。他方、種類数の多いチョウ形類すなわちマメ科植物でみられるように、結実の器官がすきまなくとじている花もたくさんある。ところがこのような花のあるものでは、いやたぶんすべてのもので、花の構造とハチが蜜をすうさいに、その花の花粉を柱頭のうえにおしあげたり、あるいは他の花から花粉をはこんできたりするのである。チョウ形花にハチの来訪が必要であることを私は実験で明らかにし、そのことについてはすでに公表したが、じっさいハチが花から花へととびながら花粉をはこんでいかないというのは、ほとんどありえないことであり、そして私が信ずるところでは、このように花粉をはこぶのは植物にとっておおいに役にたつことである。ハチはラクダの毛でつくった筆のはたらきをするわけで、受精を保証するには、まず一つの花の葯にふれ、つぎにおなじように他の花の柱頭にふれば、それで十分なのである。だが、ハチはこのような方法でちがった種間に多数の雑種をつくりだすのでであると、想像してはならない。もしも諸君がある植物にその植物の花粉と異種の植物の花粉とを同時につけたとすると、グルトナーが証明したように、前者が優勢な作用をあらわし、かならず、そして完全に、異種の花粉によって影響がおよぼされないようにしてしまうであろう。

花が濡れると受精率が落ちる（私はそんなこと知らないが）にもかかわらず、花の大半が開いているのは他からの花粉を受け取るためだと、ダーウィンは考える。閉じた花はハチなどによる媒介を期待しているからである。といて、他の種の花粉が着いてもそれは受精しないから、種間の交雑は起こらないという。

ある花の雄しべが突然に雌しべにむかってはねかえったり、一つずつ順にゆっくり雌しべのほうにうごいたりするときには、その仕かけはただたんに自家受精を保証するだけに適応しているもののようにみえる。そして、それがこの目的に役だつことも、うたがいない。しかし、ケールロイターがヘビノボラスで証明したとおり、雄しべをはねかえらせるのに、しばしば昆虫のはたらきが必要である。ヘビノボラスは自家受精のために特殊の仕かけをもっているように思われるが、まさにこの属で、よく似た種類のものあるいはいろいろの変種をたがいに近接して栽培しておく、純粋な実生をそだてるのがほとんど不可能であるほど大量に、自然に交雑のおこることが、よく知られている。他の多くの場合には、自家受精のための助けとなるものがないばかりか、シュプレングルの著述や私自身の観察で証明しうるように、柱頭が自分の花の花粉をうけとるのを有効にさまたげるような特殊の仕かけがある。たとえばロベリア・フルゲンスでは、おのおのの花で一つに結合した葯から、その花の柱頭が花粉をうけとる準備をととのえるよりまえに、無限に多数の花粉粒を一つのこらずはらいさってしまうような、まことにみごとな精妙な仕かけがある。そしてこの花は、すくなくとも私の庭ではまったく昆虫の訪問をうけないので、まったく種子をつけない。だが一つの花の花粉

を他の花の柱頭につけてやったところ、多数の実生がえられた。そのちかくにはえていてハチがおとずれる多種の口ペリアでは、自由に種子を生じる。他のひじょうに多くの場合には、柱頭が自分の花の花粉をうけとるのをさまたげる特殊の機械的な仕かけは存在していないが、しかし柱頭が受精の準備をするまえに葯がはじけてしまうか、あるいはその花の花粉ができあがるまえに柱頭の準備ができてしまって、実際にはそれらの植物では性がわかれていることになり、習性的に交雑しなければならなくなっていることを、シュプレングルは証明しており、私もそれをたしかめることができた。これらは、なんと奇妙な事実であろうか。おなじ花の花粉と柱頭の表面とが、あたかもまさに自家受精を目的とするかのように近接して位置しているのに、かくも多くの場合に相互に無用であるというのは、なんと奇妙なことであろうか。そして、他の個体とときどき交雑することが有利である、あるいは不可避であるという見解にもとづけば、これらの事実はいかに簡明に説明されることであろうか。

とにかく細かいことまでよく知ってるね、ダーウィンは。

キャベツ、ダイコン、タマネギ、そのほかいろいろの植物の多数の品種を、たがいに近接したところで実をむすばせると、それからそだった実生の大多数が雑種になってしまう。たとえば、私はキャベツで、たがいにちかくにうわっている、ちがった変種にぞくする何本かのものから二三本の実生をえしたが、そのうち七八本だけがもとの種類のままで、しかもそのなかにも完全にそっくりではないものがあつた。ところで、キャベツの花はどれでも、その柱頭が自分の花にある六本の雄しべでとりかこまれているだけでなく、おなじ植物についている他の多くの花の雄しべによつても、とりかこまれている。では、それなのになぜ、これほど多数の実生が雑種化しているのであろうか。私の思うところでは、それはちがった変種の花粉がその花自身の花粉より優勢な作用をもつことにもとづいているのに相違なく、そしてこれは、おなじ種のちがった個体間の交雑で優良な生物が生じるといふ一般的法則の一部をなしていることなのである。ちがった種を交雑させたときには、それと正反対になる。というのは、それぞれの植物自身の花粉は、多種の植物の花粉より、つねに優勢だからである。しかし、この問題はもっとさきの章で、あらためてとりあつかうことにしよう。

違った種の花粉は受精が妨げられるのに、違った変種の花粉は、同じ変種の花粉よりも優勢となる。ここには変種と種の大きな違いが見られる。「変種は発端の種である」といふダーウィンの考えが、そう簡単に正しいかどうか分からない。ダーウィンは、変種と種の違いは、その差の量的な違いで、質的な違いはないと考えているようである。しかし、そのことにダーウィンは触れない。

無数に多くの花をつけた巨大な樹木の場合には、花粉が木から木にはこぼれることはめつたになくて、せいぜいおなじ木の花から花にはこぼれるだけであり、そしておなじ木についた花はただかぎられた意味で別の個体と考えることができよう、という異論が、となえられるかもしれない。私は、この異論はあたつていと信じる。しかしまた、自然は樹木にたいし、べつべつの性をもつた花をつけさせるという傾向をつよくおひさせることによつて、それにいちじるしく反対していることも信じている。性がわかれていれば、雄花と雌花がおなじ木についていても、花粉は規則的に花から花にはこぼれて

いかなばならず、これは花粉が木から木にはこぼれる機会を多くすることになっているであろう。私は、どの目でも木本植物は木本でないものより性のわかれている場合の多いのが通例であることを、イギリスの植物について発見している。私ももともとおうじてフーカー博士はニュージーランドの木本植物を、またエーサ・グレー博士はアメリカ合衆国のものを表につくってくれたが、その結果は私の予想どおりであった。だが他方、フーカー博士は最近に、オーストラリアではこの規則があてはまらないことがわかったと、私に知らせてくれた。私がここに木本植物の性について二、三の記述をかかげたのは、ただ単に、この問題についての注意をうながすためである。

多数の花を咲かせる木の場合は、同じ木だから、花が違って他家受精とは言えないという反論に対してダーウィンは、昆虫が媒介するとき、他の木へもいくだろうと反論する。ともかくダーウィンは、草でも木でも、雌雄が分かれつつあることを証明しようとしているのである。

つぎに、ごくわずかの紙面で、動物のことをのべようと思う。陸上には、陸生軟体動物やミズミズのように、若干の雌雄同体動物が生息している。だが、これらはぜんぶ交接する。陸生動物で自家受精をするものを、私は一例も知っていない。陸生植物の場合とつよい対照をなしているこの顕著な事実は、ときどき交接することがどうしても必要であるという見解にたち、また、陸生動物が生活する環境と受精要素の本質などを考えるならば、理解することができよう。なぜなら陸生動物では、二個体が合体することなしにときどき交雑をいとなむための、植物の場合における昆虫や風の作用に相当する手段はないことが、わかっているからである。水生動物では、自家受精する雌雄同体動物が多数ある。しかし水中では水流が、ときどき交雑をおこさせるための明白な手段となる。最高権威者の一人、ハックスリ教授にもたずねてみたのであるが、花の場合と同様に、生殖器官が体内に完全に閉鎖されていて、外部から達することも他の個体からときたま影響を受けることも物理的に不可能であることが証明されるような雌雄同体動物を、私はまだ一例も知っていない。蔓脚類はこの観点からするとひじょうに大きな困難を提示するもののように、私にはながくおもわれてきたのであるが、私はある幸運な機会に、ともに自家受精の雌雄同体動物である二個体もときに交雑することを、証明することができた。

動物でもまた、自家受精だけやっているものはないことを強調する。

動物でも植物でも、おなじ科、いやおなじ属ですら、それにぞくする種が全体制のほとんどの点で密接に一致していながら、そのあるものは雌雄同体、あるものは異体であるのが稀れでないということは、奇妙な変則として多くの博物学者をおどろかせてきたにちがいない。しかしもしも実際にすべての雌雄同体動物がときどき他の個体と交雑するものであるなら、雌雄同体動物と雌雄異体動物とのちがいは、機能にかんするかぎりごく小さいということになる。

これらのあまたの考察や、また私があつめはしたがここには掲載できない多数の特殊な事実にもついで、植物界でも動物界でも他の個体とときどき交雑するのが自然の法則であるという考えに、私はつよくかたむいている。この見解では困難な場合が多数あることも私は十分に承知しており、それらの場合のあるものを、いま私は研究している。ところで最後に、結論として、

多くの生物では子をうむごとに二個体間の交雑が明らかに必要であり、また他の多くのものではそれはたぶんながい間隔をおいてこるだけであるが、しかし私の想像では自家受精が永久につづけられるものは一つもないということ、のべることができるであろう。

ここでダーウィンの言いたかったことは、要するに動物でも植物でも、自家受精だけ行なっているものではなく、すべての生物が交雑するということである。もっとも、そのことが、今議論している自然選択による新種の起原に、どう関係するのか、もう一つよく分からない。

ここでダーウィンは本題にもどる。自然選択が力を発揮するのはどういう条件であるかを考察するのである。

自然選択に有利な環境——これは、きわめて複雑な問題である。遺伝的な多岐にわたる変異性が多量であることは有利だが、しかし私は、たんなる個体的差異だけでも仕事がなされるのにたりると信じている。個体数が多いことは、ある一定の期間内に有用な変異が出現する機会を多くするので、各個体の変異性の量が比較的小であることを、おぎなうことになる。そして、これは成功の極度に重要な要素であると信じられる。《自然》は自然選択の仕事のために広大な時をあたえているけれども、しかし無限の時をあたえているのでもない。なぜなら、あらゆる生物はいわば自然の経済のなかに自分の場所を占めようと努力しているので、もしもある種がその競争者と相応した程度に変化、改良されなかったならば、その種はたちまちほろびてしまうだろうからである。

まず、自然選択の基礎となる変異である。ダーウィンは、個々の個体にたくさん変異が生じるよりも、個体数が多いということを重要視する。時間は無限ではない。それは、自然の国家（＝自然の経済）の中の一つの場所が空いた場合、その場所を狙う生き物は他にもいるから、早くしないと競争に負けるからである。そのとき、個体数が多いことは非常に有利になる。

ついでダーウィンは、種分化におよぼす交雑の影響の考察に入る。例によって、人為選択から始める。

人間がおこなう方法的選択では、育種家がある一定の目的のために選抜をするので、自由な交雑はその仕事のさまたげになる。しかし多くの人が品種を変えようという意図によるのではなしに、完成度についてほぼ共通の標準をもち、そしてだれもがみな最良の動物をえてそれをふやそうとするのであれば、たとえおとつた動物との交雑が大量におこなわれたとしても、この無意識の選択過程によって、多くの改良と変形が徐々ではあるが確実におこなわれるであろう。

人為選択の場合、ある有用な変異を持った個体は、同じ変異を持っている個体とのみ交配し、自由には交雑させないことは当然である。元にもどってしまうからである。しかし、そこまで意図的でなくても、こんな動物を作りたいと思っているだけで、嚴重に交雑を禁止しなくても、だんだん改良が進むはずだとダーウィンはいう。でも、ほんとうだろうか。自然の、特に連続した広い場所で自然選択が行なわれる場合は、ある程度の交雑は避けられない。それでも選択は進むと言いたいために、こんな例を持ち出したことは分かるのだが。

自然界においても、同様であろう。というのは、あるかぎられた地域のなかで、その自然国家のうちにもっと完全に占められる余地をのこしている場所があるとすると、自然選択はつねに、程度はさまざまであるとしてもとにかく正しい方向に変異しているすべての個体を保存し、かくして未占拠の場所をよりよくみたくことにむかっていこうからである。ところがその地域がひろくて、生活条件のちがっていることがほとんど確実ないくつかの区域があるなら、またしたがって自然選択が一つの種をあまたの区域で変形し改良しているならば、それぞれの区域の境界で同種の他の個体との交雑がおこることになる。この場合には交雑の作用は、それぞれの場所でその条件にしたがい全個体をつねにまったく同様に変化せしめようとする自然選択でうめあわせられることは困難である。なぜなら連続した地域では、すくなくともその物理的条件は一般に区域から区域へと目だたぬほどに移り変わっているからである。

「がきられた地域」というのは、例えば島のような隔離された地域のことで、そこに一つの場所が空いているなら、ちょうど人間が無意識のうちに「最良の動物」を作ろうと選択している場合と同じように、自然選択はその場所に最もふさわしい動物を作ろうと働く。少しくらい交雑が起こっても、やがてはその場所を埋めるものが作られていくはずだ、と言うわけである。

ところが、非常に広い地域で、その中にいくつか生活条件の違う区域があるようなところでは、なかなかそうはいかない。でも、そういう地域で種分化が起こることこそが、ダーウィンの本命なのである。しかし、そこでは交雑が自然選択に打ち勝ってしまうと認めざるを得ない。何故なら、物理的条件は連続的に変わっていくから、そこに線を引くことは出来ないからである。

交雑の影響がもっともいちじるしいのは、子をうむたびごとにまじわる動物、歩きまわることの多い動物、およびひじょうに急速に繁殖するのでない動物である。それで、このような性質をもつ動物——たとえば鳥類——では、変種は一般にそれぞれちがった国にかぎられていることになるであろう。実際にそうになっていると、私は信じている。ときたま交雑するだけの雌雄同体生物や、子をうむごとにまじわりはするが移動することが少なくまた急速に増殖する動物では新たな改良された変種はいかなる地点でも速やかに生じることが可能で、またそこで一体となって維持されることができ、そのためたとえ交雑がおこっても、それは主としておなじ新変種にぞくする個体間でおこなわれるということになる。局地的な変種は、このようにしていったん形成されると、それから徐々に他の場所にひろがっていきうる。育苗家は上記の原則にしたがって、つねにおなじ変種にぞくする大量の植物から種子をとることにしている。それによって、他の変種との交雑の機会を少なくすることができるのである。

そこでダーウィンは、毎年交尾し、移動力が大きく、子供の数が少ない動物では、連続した地域での種分化は無理だろうと判断する。つまり、交雑が地域全体で全面的に起こり、変異が帳消しにされてしまうからである。鳥類などがこれにあたり、だから鳥は「ちがった国」つまり隔離された地域にしか変種が生じないという。そんなことを言ってもいいのか、と思うが、言っているのだから仕方がない。

ところが、毎年交尾はしても、あまり移動せず、急速に増える動物は、広い地域のそれぞれの区域で、その条件にあった変種を急速につくり、幾つかの変種集団ができるはずだという。交雑は境界でしか起こらず、中心部では変種は固定していく。それが次第に周辺

部へ広がっていくような状況が起こる。

子をうむたびごとにまじわり、繁殖のゆっくりである動物の場合ですら、交雑が自然選択をおくらせる影響を、過大にみつもってはならない。なぜなら、おなじ地域内でおなじ動物の諸変種が、ちがった区域でくらすため、わずがちがった季節に繁殖するため、あるいはいろいろの変種がおなじ種類のものをつがうのがつねであるため、ながくべつの変種のままでありうることを示すはなはだ多くの事実を、私は列挙することができるのである。

先程の鳥のような動物の場合でも、繁殖期をずらせたり、同じ種類の変種とつがうようになつたりして、連続した地域にしながら生殖隔離が生じることもある。ダーウィンは確かによく調べていると感心せざるを得ない。

交雑は自然界において、おなじ種あるいはおなじ変種の諸個体の形質を変化せしめず均一にたもつうえで、きわめて重要な役割をしている。それゆえ交雑は明らかに、子をうむごとにまじわる動物において、はるかに有力なはたらきをするであろう。だが私はすでに、すべての動物およびすべての植物でときどき交雑がおこなわれると信ずるにたりる理由があることを示そうとこころみた。これらの交雑がながい間隔をおいておこなわれるとしても、こうして生じた子は長期にわたる自家受精で生じた子よりはるかに強壯でまた多産であり、そのため生存して同類をふやす機会を多くもつこと、そしてこのようにして長年月のあいだには交雑は、たとえ稀れにおこなわれるのであっても、大きな影響をもつようになるということが、たしかであると信じられる。もしもまったく交雑しない生物があったとしても、生物における形質の均一性は、生活条件がおなじであるあいだは、ただ遺伝の原理によって、ならびに自然選択がほんらいの型からはずれるものをほろぼすことによって、保持される。しかし生活条件が変化したときには、その生物は変化を受け、形質の均一性は、同様に有利な変異を保存する自然選択によってのみ、その変化した子孫にあたえられることができる。

ここでダーウィンが何を言おうとしているのか、実はよく分からない。交雑は変異をもとへもどす働きをすると同時に、またさまざまな変異を誘発する、ということだろうか。

隔離もまた、自然選択の過程における重要な要素である。限局された、あるいは隔離された地域では、もしもひじょうに広くないならば、生活の有機のおよび無機的条件は一般にいちじるしく均一であろう。それで自然選択は、変化しつつある種のすべての個体を、全地域をつうじ、おなじ条件との関係でおなじように変化させることになるであろう。隔離されていなければそれに隣接して環境の異なる土地に生息していたかもしれない同種の個体との交雑もまた、さまたげられるであろう。だがおそらく隔離は、気候の変化とか土地の隆起とかというようななんらかの物理的变化ののちに、よりよく適応した生物が移住してくるのをさまたげるうえで、いっそう有効な作用をするであろう。こうして、その国の自然の経済において新しい場所が、旧来の居住者が闘争し、構造および体質の変化によって適応していくために、開放されるようになる。最後に隔離は、移住をさまたげ、したがってまた競争をさまたげることにより、新たな変種が徐々に改良されていくための時間をあたえる。このことは、ときに新種の形成のために重要なものとなるであろう。しかしもしも隔離された地域が、障壁にかこまれているためかあるいはきわめて特

殊の物理的条件のためにひじょうに小であるならば、その地域に生息する個体の全数は当然ひじょうに小となる。そして個体数がすくないということは、有利な変異の出現の機会をへらすことになり、そのため自然選択による新種の形成をいちじるしくおそくさせることになるであろう。

ダーウィンは、アメリカ大陸から1000キロも離れた太平洋の孤島ガラパゴス群島で、初めて進化に気づいたと言われている。そこには、アメリカ大陸と基本的には同じだが、わずかつ違った動物が住んでいた。新しく出来た火山島ガラパゴスに、アメリカ大陸から渡ってきた動物が住み着き、隔離による種分化が起こったに違いないと、ダーウィンは考えたのだろう。「気候の変化とか土地の隆起とかいうようななんらかの物理的变化のうちに」というのは、明らかにガラパゴスのような例を指していると思われる。ただダーウィンは、そういう地域は小さく、個体数も少なく、変異もしたがってあまり生じないから、自然選択の進み方がおそいと、つけ加えるのを忘れない。

これらの記述が正しいかどうかをためすために、自然界に目をむけ、大洋中の島のような隔離された小地域をしらべてみると、のちに《地理的分布》の章でみるようにそこでは生息する種の全数は小であろうが、しかしこれらの種の大部分は固有のもの——つまりその地域で生成し他の地域では生成しなかったものである。それで大洋中の島は、一見したところでは新種の生成のために高度に好適なところであったように思われる。だが、それではわれわれは、大きな思いがいをしてしまうことになる。隔離された小地域と大陸のような開放された大地域のいずれが新生物の形成のためにもっとも有利であったかをたしかめるには、おなじ時間をとって比較しなければならないのであるが、われわれにはそれは不可能なのである。

そこで調べてみると、大洋中の島は種数は少ないがそこにしかない固有種が多いことが分かる。ダーウィンの言うように、隔離された地域では新種が出来やすいのである。ところがダーウィンは、それに重きをおかない。ダーウィンの進化の本命はあくまでも、大陸のような大地域にある。

創造説を打ち倒すだけであれば、この隔離による種分化を強調するだけでもよいと思われるが、ダーウィンの目的は、創造説の破壊ではなかった。それに代わる壮大な生物進化の法則を打ち立てたかったからである。そこで、現代でもうまく説明できない、連続した地域における種分化の問題を検討していく。

新種の生成のために隔離が相当に重要であることを私はうたがわないのであるが、全体としていえば、地域がひろいということのほうが、とくに長期間にわたって存続しひろく分布するような種の生成のためにはいっそう重要であると、私は信じるにいたっている。開放されたひろい地域では全体として、同種の個体が多数あるために有利な変異のあらわれる機会が多いというだけでなく、既存の種が多数であるために生活条件が無限に複雑化している。もしもそれら多数の種のあるものが変化させられたり改良されたりすれば、他のものもそれに相応した程度に改良されなければならないことになるであろう。そうでなければ、それらの種はほろびてしまわねばならないであろう。おのおのの新たな生物もまた、おおいに改良されると、開放され連続した地域にひろがることができるようになり、それにより他の多くのものと競争することになるであろう。それゆえ、隔離された小地域よりも大地域のほうが、新しい場所がより多くつくられ、それらの場所をみだすための競争がよりきびしいということになる。さらに、広大な地域が海面の変動のため現在は

連続していても、最近までは断絶した状態にあって、そのため隔離のよい結果が一般的にある程度までえられていたという場合も、しばしばあると思われる。

隔離された小地域では、たしかに種分化は起こるけれども、競争相手が少なく、大して改良されない。それに大して大地域では、非常にたくさんの競争相手がいて、お互いにしのぎを削ることになる。そういう地域で勝利をおさめた種は非常に改良され、大いに発展し、大きな分布域と多数の個体を持つようになる。ダーウィンのいわゆる「優勢な種」である。そしてダーウィンは、こういう優勢な種こそが、生物の進化の主流をなす、つまり将来、それらの子孫が繁栄すると考えているのであろう。

最後に、以下を私の結論としてのべる。隔離された小地域はおそらく若干の点では新種の生成のために高度に好適ではあったが、変化の経過は一般には大きな地域のほうがより急速であった。そして、それよりさらに重要であるのは、大きい地域で生成しすでに多数の競争者にうちかた新しい生物は、もっともひろく分布するものであり、もっとも多くの変種や種を生じるものであり、それゆえ生物界の変化の歴史において重要な役割を演じるものだということである。

以上がダーウィンの結論である。しかし、そういうためには、連続した地域での種分化という難問に解答を与えねばならない。それについてはこの章の終りの「分岐の法則」で出てくる。

われわれはたぶん、これらの見解にもとづいて、あとで《地理的分布》の章で再説すべき若干の事実を理解することができるのであろう。それは、たとえば、小大陸オーストラリアの生物が大地域であるヨーロッパ＝アジアの生物に以前に屈服し、現在も明らかに屈服しつつあるということである。それからまた、大陸の生物が各地で、その多数のものが島に帰化しているということもある。小さな島では生存のための競争はそれほど激烈ではないので、変化もさほどでなく、絶滅もわりあいすくなかったようである。マデイラのフロラがオスワルド・ヘールによればすでに絶滅したヨーロッパの第三紀フロラに似ているというのは、おそらくそのためなのであろう。淡水の水域は全部あわせても、海あるいは陸にくらべて、小区域でしかない。したがって淡水の生物間の競争は、他の地域における競争よりきびしくはないであろう。また新たな生物は他の区域におけるよりゆるやかに形成され、古い生物が絶滅するのもおそいであろう。淡水中には、かつて優勢であった目の遺物ともいべき硬鱗魚類の七属が生息している。また淡水中には、カモノハシおよびレピドシレン〔肺魚類の一種〕のように現在世界中でもっとも異様な生物として知られ、化石と同様に、自然の階段において現在ではひろくへだてられている諸目のある程度までつないでいる生物が、発見されている。これらの異様な生物は、生きた化石とよんでさしつかえないであろう。これらの生物は、限局された地域にすみ、そのためあまりきびしい競争にさらされなかったことによって、現在まで生きながらえてきたのである。

オーストラリアの有袋類が人間の持ち込んだ真獣類によって駆逐されつつあるのは確かだが、それをオーストラリアとアジア＝ヨーロッパの大陸の大小だけに原因を求めるのは少々無理だろう。有袋類と真獣類とでは、身体の体制そのものに差があるからである。大陸の生物が島に導入されると、その島の同類（ダーウィンの言葉で言えば、自然の経済の

中の同じ場所を占めている種)を追い出すことは、広く知られている。チョウセンイタチが入ってきて、日本に昔からいたホンDOIタチは追い詰められつつある。逆に、島育ちの種は、大陸へ行ってもまず定着することはない。「東大や京大のドクター生が金沢大学へやってきて助手になるが、金大のドクター生は東大や京大の助手にはまずなれないだろう。それといっしょだよ」と、金大のマスター生には説明する。うなづいてしまうから始末に負えない。

大陸でも淡水域は、陸上や海洋にくらべると、種数が少なく競争は激しくない。そこで、大昔の生き物が「生きた化石」として残っていることが多い。ここで上げられている硬鱗魚の7属というのは、おそらく、アフリカの淡水に住むポリプテルス、アメリカの淡水魚、アミアとガー、それに肺魚3属(エピケラトダス、プロトアテルス、レビドシレン)などであろう。一つ足りないが、ひょっとしたらチョウザメを入れているのかも知れない。チョウザメは卵を産みに川へ上がってくる以外は海に住んでいるのだが、湖同様のカスピ海などにも住んでいるから、淡水魚として扱っているのだろう。もっとも、オーストラリアのエピケラトダスが当時発見されていたかどうか、よくは知らない。なお、硬鱗魚類という言葉は、ここに上げた古代魚のすべてが、現代の魚よりも硬くて分厚い鱗を持っていたことから名づけられているが、現在は使われていない。

レビドシレンは南アメリカの肺魚の属名、カモノハシはオーストラリアに住む単乳類である。肺魚は魚のくせに肺を持っていることから、魚と両生類の間、カモノハシは哺乳類のくせに卵を産むから、爬虫類と哺乳類の間をつなぐ「生きた化石」とダーウィンは考えたのだろう。カモノハシはほとんど化石が出ていないのでよくはわからないが、爬虫類から生まれただけの哺乳類の姿をとどめているのではないかと考えられている。肺魚のほうは、しかし、上陸して両生類になった魚(肉鱈亜綱・総鱈目)とはやや違う系統(肉鱈亜綱・肺魚目)で、もちろんダーウィン時代には発見されていなかったが、シーラカンスのほうが、上陸した魚に近い。もっとも、ダーウィンの期待に反して、シーラカンスは競争の激しいはずの海にいる。でも彼は、深い海の底から離れず、自ら競争を下りているような魚である。

自然選択に有利な環境と不利な環境とを、この問題の極度の複雑さがゆるす範囲内で、総括しておく。私は未来を展望しつつ、つぎのように結論する。陸生の生物にとっては、たぶん海面がなんども変動し、したがって長期間にわたって断絶した状態になるではあろうが、広大な大陸の地域が、ながく存続しひろく分布するような生物の新しい種類を多数生成させるのにもっとも好適である。なぜなら、その地域は最初は大陸として存続し、この時期に個体数も種類も多数であった居住者が、ひじょうにきびしい競争をしていただろうからである。土地の沈下でいくつかのはなればなれの大きな島にわかれたときには、おのおのの島にはなお同種の個体が多数存在しているであろう。それにより、それぞれの種の分布区域の境界における交雑はさまたげられるであろう。さらに、なんらかの種類の物理的変化がおこってからの中には、移住は阻止され、それぞれの島の自然の国家における新たな場所は、旧来の居住者の変化によってみだされていくであろう。そして、それぞれの場所では変種が十分に変化し完成化していくための時間が、あたえられることになる。土地がふたたび隆起すると、島々はつながって大陸となり、そのとき激烈な競争が再開される。もっとも好適な、あるいは改良された変種が、分布範囲をひろげていくことができるであろう。改良のおとつた種類の絶滅が多くおこり、再現した大陸のさまざまな居住者の相対的なわりあいも、また変化させられるであろう。そして、居住者をさらにいっそう改良し新種を生成させる自然選択にたいして、ふたたび十分なはたらきの場ができるであろう。

ここでは、ダーウィンは、連続した地域での種分化の困難を、大陸を沈降させいくつかの島に分かれさせることによって回避している。島に隔離された各変種が変異を続け、次にまた大陸が上昇して島が地続きになったとき、もう交雑は起こらないからである。しかし、そんな都合のよい大陸の上下がいつでもどこでもあったはずはない。

自然選択が極度に緩慢にはたらくものであるということ、私は完全に承認する。自然選択の作用は、なんらかの種類の変化をこうむりつつ土地の居住者のどれかによってよりよく占められる場所が、自然の国家のうちにあるかどうかによって依存する。このような場所の存在はしばしば、きわめて緩慢であるのが普通な物理的变化と、よりよく適応した種類の移入がさまたげられることとに、かかわっている。しかし自然選択の作用はおそらく、それよりももっと、居住者のあるものが緩慢な変化をなし、そのため他の多くの居住者の相互関係がみだされることに依存することが多いであろう。有利な変異が生じなければなにごともおこらず、そして変異そのものは明らかに、つねにきわめて緩慢な過程である。この過程は、しばしば、自由な交雑によっていちじるしく遅延させられる。多くの人は、このようないくつかの原因だけで自然選択の作用を完全に停止させるのに十分だと、声を大にしていうであろう。私はそうは信じていない。そうではなくて、私は、自然選択はつねに緩慢に、しばしばただながい時間をかけてのみはたらくものであり、また一般に同時にはおなじ地域のただきわめて少数の居住者だけに作用するものであると、信じている。さらに私は、このひじょうに緩慢で断続的な自然選択の作用が、この世界の居住者が変化してきた速度と様相について地質学のかたるどころと完全によく一致するというところをも、確信している。

次にダーウィンは、自然選択はきわめてゆっくり働くということで、それが実際に行なわれていることの証明とする。つまり、うんと時間をかければどんなことでもできるというわけである。ここでもダーウィンは、自然の経済の中にある場所をめぐって変化が助長されることを強調する。

選択の過程は緩慢ではあるけれども、弱小な人間が人為選択の力で多くをなしうることをみれば、変化の量にたいしても、また自然の選択力によりながい時の経過のあいだになされた全生物の相互間および生活の物理的条件にたいする、適応の美しさと極度の複雑さとにたいしても、限界を付するわけにはいかない。

選択は緩慢に働くが、その結果はすばらしいと、ダーウィンは自画自賛する。生物の変化は、キュビエ流の突然の大変動によるのではなく、微小な変化の積み重ねで生じるといって、ダーウィン流の変化の強調である。

ついでダーウィンは、自然選択説の重要な要因である、種の絶滅の説明をする。ただし、具体的な自然選択と絶滅の関係は、さらにその次の「分岐の法則」で行なわれる。ここでは絶滅が必ず生じるといって、一般論である。

絶滅——この問題は《地質学》の章で、さらに十分に論じられる。しかし自然選択と密接な関係があるので、ここでもふれておかねばならない。自然選択は、なんらかの点で有利で、そのため存続する変異の保存によってのみ、作用しうるものである。だが、全生物がたかい幾何学的比率で増加していくのでどの地域もすでに居住者がいっぱいになっており、そのため、選択された好適の種類のおのおのが個体数をましていくにしたがい、好適さのおとつ

た種類は個体数がへり、稀になっていく。地質学のかたるところでは、希少化は絶滅の前ぶれである。われわれはまた、少数の個体で代表される種類は季節の変動や敵の数の変動で完全な絶滅の機会にさらされることが多いと、考えることができる。

生物は育つよりも余計に生まれる。そこで競争が始まり、個体数を増やすものが出てくる。収容力に限りがあがるかぎり、個体数を減らすものが出てこざるを得ない。個体数減少は必然的に絶滅につながる。

一言注文をつけておこう。個体数が少々減っても、そのすべてが絶滅するとは限らない。10年に一度しか見つからないような種が、けっこうたくさんいるからである。

しかし、それよりもっとさきにすすんでも、よいであろう。というのは新しい種類がたえず緩慢に生じつつあるのだから、種の数が増加していくことが信じられないかぎり、多くのものが絶滅していくはずだということになるからである。種の数が増加しているのではないことは、地質学によって明白にされている。われわれは実際に、なぜ種数がこのように増加しなかったのかという理由について、知ることができる。それは、自然の国家のうちにある場所の数が無限に多くはないからである——ただし、どの地域もすでに種数が極大に達しているかどうか、それを知る手段をわれわれはもっていないのではあるが。おそらくいかなる地域も、まだいっぱいになってはいないのであろう。世界中のどこよりも植物の多くの種が密集している喜望峰でも、若干の外来植物が帰化しており、われわれの知るかぎりでは、それによって土着のものの絶滅はおこっていないのである。

ここでのダーウィンの論理は、珍しく矛盾している。一つは、「新しい種類がたえず緩慢に生じつつあるのだから」と、新種の起原を前提にしている点である。ダーウィンは、新種が出来ると言うことを、この本で証明するはずではなかったのか。そして種数を有限として、新種が出来る以上、絶滅する種があるはずだということ。種数が有限である（たしかに無限とは言えないが）かどうか、証明されていない。

そして、種数が有限であるのは、自然の経済の中の場所が無限ではないからだ、という。ところが、それもまた、何の根拠もないのである。

すでに説明した通り、ダーウィンは、自然の経済の中の場所という概念を、ほとんど具体的には説明していない。人間社会になぞらえて、そういうものがあるのだろうと言っているにすぎない。この概念は、具体的に考え始めると、どうにも收拾がつかなくなるのである。

ダーウィンの場所は、それをめぐって種が競争し、取り合いする所である。すなわち、一つの場所には一つの種がいる。だから、すでにいっぱいになっているところでは、種の数と場所の数は等しい。微生物から大木まで含めて、そこに千種類の生物がいたら、そこには千個の場所があるということになる。ある一つの地域、それが小さな島でもよいし大陸でもよいが、を考えてみよう。この論理からするならば、まず決めなければならないのは、場所の数である。場所は、そこでただ一種類の生物を生活させる条件を備えたところである。これは、前に述べたキュピエの「ワンセットの生存諸条件」にあたるものだろう。ダーウィンもそれを念頭に置いていたのではないかと、私は考えている。ところが、ある地域の場所をワンセットの生存諸条件として、具体的にいくつか考えようとすると、そんなものとても出来たものではないことが、すぐに分かる。しかも、一つや二つではない。例えば、熱帯のサンゴ礁に住むすべての生物（種）は、おそらく数万、あるいは数十万に達するだろう。その一つ一つについて、それぞれの場所を区別し記載できるだろうか。

私は、かつて、サンゴ礁にすむチヨウチヨウウオ類について、一度やってみようとして、2～3分であきらめたことがある。たった50～60種くらいだったのだが。

こういう場合にどうするかと言うと、先に種の数を調べ、その数をもってその地域の場所の数とするのである。それ以外に方法はない。ダーウィンのいう「自然の国家のうちにある場所の数が無限に多くはないからである」というのは、だから、ダーウィンが勝手にそう決めているだけの話で、種の数有限であるという証明にはならない。種の数によって場所の数を決めているのだから。もっとも、ダーウィンも気になったとみえて、「ただし、どの地域もすでに種の数種大に達しているかどうか、それを知る手段をわれわれはもっていないのではあるが」とつけ加えている。

ここでダーウィンの記述を読むと、ダーウィンの言う通りであれば、ちょっとおくれをとったものはたちまち淘汰され、種類相はどんどん単純化していくような気がする。むしろ私は、このダーウィンの「自然の経済とその中の場所」という考え方を、自然における種の多様性を証明するものとして、評価するべきだと思っている。そのことについてはこの第四章を読み終ったところで、少し説明したい。

さらに、個体数のもっとも多い種は、ある一定の時期のあいだに有利な変異を生ぜしめる機会をもっとも多くもつであろう。記録されている変種つまり発端の種をもっとも多数生じているのは普及している種であることを示すために第二章であげた諸事実が、このことの証明になる。それで、希少な種は一定期間内に変化しあるいは改良されるのがおそく、そのため生活のための競争で、より普及した種の変化した子孫たちにまけてしまうのである。

ここでも、ダーウィンの優勢な種に対するえこひいきが見られる。私のは、希少な種に対するえこひいきだが。

これらの多くの考察から、新しい種が自然選択によりしだいに生じるにおうじて、他のものの数がだんだんへり最後には絶滅してしまうということが、必然的に結論されると、私は考える。変化と改良をうけつつある種類と密接な競争をしている種類は、当然、もっとも多くの影響を受けるであろう。すでに《生存闘争》の章で、もっともよく似た種類——同種の変種、同属の種、あるいは近縁の種——が、ほぼおなじ構造、体質、習性をもつために、一般にもっともはげしく相互に競争するのであることを、のべた。したがって、どの新変種あるいは新種も、それが形成されるあいだに、もっとも近縁のものをもっともはげしく圧迫し絶滅にみちびいていくのが、ふつうである。飼育栽培生物でも、改良された種類を人間がえらんでいくということによって、同様な絶滅の経過がおこる。ウシ、ヒツジその他の動物の新たな品種や植物の変種が、いかにすみやかに古くからのおとつた種類にとってかわっていくかを示す多くの興味ある例を、あげることができる。ヨークシャーではむかしからの黒ウシが長角のウシにとってかわられ、そしてこれら長角のウシが「虐殺的な悪疫によるかのようにして」「短角のウシによっていっそうされた」（ある農業著述家の言葉）ことが、歴史的に知られている。

ここで初めてダーウィンは、絶滅の一般論から具体論にはいる。ダーウィンの考えている絶滅は、変化しつつある種あるいは変種がお互いに闘争し、遅れをとった変種が絶滅するということであり、彼はそのことによって、変種間の小さい差異を種間の大きな差異へと昇格させるのである。そのことは、次の「形質の分岐」で、ごてごてくどくど、事細かに論じられる。次号でこんこんと説明するから、あらかじめ覚悟せられよ。

【編集者への手紙】

会長そして編集局のみなさんへ

(関東地方の新会員より)

先日、新しく会員になった者です。入会させていただきありがとうございました。入会早々、閉会という話を聞いてとても残念に思っています。バックナンバーをめぐってみると、何でも二代目会長の立候補者がいないとのこと。どなたかいらっしゃらないのですかね。(かくいう私も立候補はいたしません。)

さて、この新米会員の私、いただいたバックナンバーを拝見いたしまして、どういう順番で読もうかとあれこれ思案して、結局てきとうに抜き出して気になるタイトルの論文から読むという方式を採用いたしました。ただ「ダーウィン『種の起原』を読む」だけは順番に読みはじめています。私は会長の世代ではないのですが、会長の著書をずいぶん？読んだせいでダーウィンのことはいつか勉強しなければいけないと思っていた(思わされている?)のです。連載楽しみにしております。・・・と思っていたところ46・47号がいつべんに送られてきました。46号を開いてびっくり！何とこんどは新連載「毛沢東の『実践論・矛盾論』を読む」があるではないですか。(これは楽しみだ、『種の起原』の連載より面白いかも知れないぞ。)これは会長の著書をずいぶん読んだせいではなく、毛沢東はいつか読まなければいけないと勝手に思っていたのです。(数年前に買った岩波文庫の『実践論・矛盾論』は、立派につん読状態です。)これは良い機会です。それにしても素晴らしい企画です。『種の起原』は会長以外の生物学者も「読め読め」と言っているようですが、『実践論・矛盾論』を「読め読め」と言っている生物学者を私は知りません。意表をつかれたというか、会長ならではというか。だいたい、この御時世に、中華人民共和国はさておきこの国において毛沢東を「読め読め」という人がいるというのがよいではありませんか。(もっとも毛沢東の研究者は教え子に「読め読め」と言っているかもしれない。)私はひねくれ者なのでみんなが興味をもったり薦めたり良いということにはそっぽを向く性質なのです。(だからオリンピックも高校野球もまるで興味がありません。だいたいオリンピックなんていう国威高揚のための祭典を何でいまだにやってるのでしょうか。そろそろやめたらどうなのでしょう。あと宇宙開発、あれもなんだかよくわかりませんよ。いったいなんのためにやってるのだから・・・。いずれは有人宇宙基地を作る計画もあるようですが、本気で宇宙に住みたいと思っている人なんているのでしょうか?)

そういえば、第1号、第2号、第5号、第6号に「野良」という方の「哲学雑話――毛沢東」という論文が載っているのですね。こちらもあわせて読ませていただきます。

今後の号もどんな方のどんな論文が出てくるか楽しみにしております。

1996年8月23日

日本生物学会誌 第49号

編集・発行

日本生物学会

金沢市角間町

金沢大学理学部生物学教室

223号室

編集無責任者

奥野良之助

振替

金沢 0-40763 日本生物学会

許可無断転載